

特集:「ICUのSDGs」: p.2

「9・11掲示板」: p.6

Think globally, act locally. 麻野(旧姓・清水) 篤さん : p.8

A_People 儀我有子さん : p.10

「闇の中で光として生きる」インド思想史・葛西實先生、卒寿のメッセージ : p.11

ICU高校数学科がユニークな本を刊行 : p.12

Christmas Homecoming 2022 @D-kan : p.14

お邪魔します! あのメジャー 国際関係学 高松香奈 上級准教授 : p.16

From the University TO: All Students : p.18

桜祭りのお知らせ : p.22

ALUMNI NEWS

INTERNATIONAL
CHRISTIAN UNIVERSITY

ICU ALUMNI
ASSOCIATION
3-10-2, Osawa

Mitaka-shi, Tokyo 181-8585

TEL&FAX : 0422 33 3320

<https://www.icualumni.com/>

E-mail : aaoffice@icualumni.com

ALUMNI NEWS
VOL.138 MAR.2023



ICU

特集

「ICUのSDGs」

ICUに「SDGs推進室」ができて1年。ここまでの実績、今後の展望について、主に環境問題の面から関係者にインタビューした。

文：新村敏雄（本誌） 写真：本人提供

推進室とは？

ICUの「SDGs推進室」は2021年4月、岩切正一郎学長のリーダーシップのもとに発足した組織。ICUはSDGs（Sustainable Development Goals＝持続可能な開発目標）が提唱される前から、リベラルアーツ教育を通してサステナビリティ達成のための取り組みを実践してきた。「ICUの学生・教職員が個々に活動していたことを集約し、見える形にする」ことを目的に、教職員と学生有志のメンバーからなるSDGs推進室が設置された。

教員は布柴達男（初代室長）、毛利勝彦（現室長）、西村幹子、キム・アレン、藤沼良典、山口富子の各先生方。職員は行政事務、管財、サービスラーニングの各部署から担当が出されている。どちらも「SDGs推進室専任」というわけではない、一種、「バーチャル」な組織と言える。さらに学生が30人程度参加している。

2022年9月から室長となられた毛利勝彦教授に、発足から1年が経過しての振り返りをうかがった。



毛利勝彦先生

—— 推進室の運営はどのようになっていますか。

毛利：メンバーは月1回、ミーティングを開催するほか、学生が組織するプロジェクトが8グループほどあり、各プロジェクトのリーダーで構成される運営グループがあります。プロジェクトは、推進室のミッションのひとつである「教育、研究、社会展開においてインパクトのある改革に取り組むこと」の中で位置付けられます。上記の3つのほか4番目の柱として、プロジェクトにどのくらいのインパクトがあったかを学生が自身で評価することも期待しています。

ICUでのSDGsの取り組みは、フォーマル教育（学校教育）とインフォーマル教育（日常活動の結果としての学習）の中間であるノンフォーマル教育をめざしています。

—— この1年でどのような実績がありましたか。

毛利：秋学期に大学横断型オンライン授業プロジェクト「国連SDGs入門」に参加しました。これは国連大学SDG大学連携プラットフォーム（SDG-UP）カリキュラム分科会が、一般教養科目として開発した講座（パイロット版）で、オンライン授業が15回行われ、私も一コマ担当しました。30ぐらいの大学から1校4人ずつが参加し、非常に活発な議論が交わされました。

同じく秋学期に、大学食堂と連携して鹿肉を使ったカレーを提供しました。昨今、野生の鹿は生態系に有害とされるほど増えすぎていると言われ、駆除が追いつかない状況ですが、駆除された鹿の肉をジビエとして活用することでこの問題について考える機会と

しました。

—— 今後の展開は。

毛利：来年度からは大学予算も申請して、年間計画を立てて活動していきます。

今後の行動計画として検討されている項目の一つが、今後数年以内に「フェアトレード大学」認証を取得することです。（フェアトレード：開発途上国の農家や手工業者など、経済的、社会的立場の弱い生産者の自立と生活改善のため、公正な価格で取引を行う取り組み）。フェアトレード大学とは、大学ぐるみでフェアトレードを普及しようとしている大学で、「フェアトレードの普及を目指す学生団体が存在する」「大学当局がフェアトレード産品を購入し使用している」など、5つの認定基準を満たす必要があります。一般社団法人日本フェアトレード・フォーラムが認証機関として審査・認定を行っています。日本の大学では2018年に静岡文化芸術大学が初めて取得、これまでに他3校が取得しています。

—— 同窓生に期待することはありますか。

毛利：国連グローバル・コンパクトの理念を日本で実現するためのローカルネットワークである、グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパンの代表理事をされている有馬利男さんをはじめ、3大環境NGOと言われるWWF、FoE、グリーンピースではいずれもICU卒業生の活躍が見られます。企業のCSR担当にも卒業生が多く、講師として授業をご担当いただくこともあり、そうした連携を今後も継続していただけたらと思います。

SDGs：2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っています。（外務省のウェブサイトより）

授業では

SDGs関係の活動をしている学生グループは、環境をテーマにしたものが多いと言える。キャンパス内の環境問題改善や学生の環境意識の向上を目指して活動しているICUサステナ、養蜂に取り組むICUハニープロジェクト（アラムナイニュース2022年3月号、p.6）、給水機プロジェクト、キャンパスの落ち葉と馬糞から堆肥を作り、それを肥料に有機栽培をする活動を行なっているICU Slow Villなどだ。SDGs推進室の学生メンバーが運営するウェブサイトもある（<https://icusdgsstudents.wixsite.com/my-site-1>）。

これらの中の複数の指導に関わっている藤沼良典准教授にお話を伺った。

SDGs

SDGs 17GOALS

SDGs 17のゴール

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 貧困をなくそう | 10 人や国の不平等をなくそう |
| 2 飢餓をゼロに | 11 住み続けられるまちづくりを |
| 3 すべての人に健康と福祉を | 12 つくる責任 つかう責任 |
| 4 質の高い教育をみんなに | 13 気候変動に具体的な対策を |
| 5 ジェンダー平等を実現しよう | 14 海の豊かさを守ろう |
| 6 安全な水とトイレを世界中に | 15 陸の豊かさも守ろう |
| 7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに | 16 平和と公正をすべての人に |
| 8 働きがいも経済成長も | 17 パートナーシップで目標を達成しよう |
| 9 産業と技術革新の基盤をつくろう | |



藤沼良典先生

——ICU 生の環境意識は高いと言っていますよ、いいでしょうか。

藤沼：意識は高いほうだと思いますが、そこから行動に移す割合は、より高いと思います。

一般教育科目の「環境研究」ではキャンパスをどうやったらより良いものにできるかと問題提起をしますが、これを履修した学生がこうしたプロジェクトを始めています。サステナでは学生食堂で使う持ち帰り容器「リリパック」の回収活動をSDGsが提唱される前からしていますが、新入生に紹介する動画を作成したり、回収した容器の再生によって障がい者の自立支援につながることを学ぶ機会となっています。回収率は80%を超えています。

ハニプロジェクト（ハニプロ）も同様で、製造や衛生面の責任者は私ですが、「やりたい」と言い出したのは学生です。2021年は23キロの蜂蜜が取れましたが、22年は春先の女王蜂の管理がうまくいかず、収量はその半分程度でした。それでも、22年10月のICU祭では開始2時間で完売しました。ハニプロの活動では雨が多くなり雑草が急に伸びる6、7月ごろに人手が足りなくなります。

——キャンパス内で管理が追いつかない竹林の拡大（竹害）についても授業で取り上げられていますね。

藤沼：夏季・秋季休暇中にそれぞれ2日ずつ開講する「環境アセスメント実習」では、キャンパスの植生のアセスメント、野川の河川敷の様相の変化の比較などに加え、キャンパスの竹林で竹の伐採をします。履修した学生の感想をみると、緑があれば自然豊かであ

るとは限らないことを理解してもらえたり、竹林管理に参加するハードルを下げるべきと感じていることが窺えました。

——11月に先生にもご参加いただいた「ICU Nature Lovers」のプレゼンでは、キャンパスでカシノナガキクイムシ（カシナガ）の被害（コナラなどの立ち枯れ）が広がっていると指摘されました。

藤沼：状況は、今動かなければならないところにきています。Google Earthで見てもわかるほどです。ホルモン剤で誘引する駆除も完全ではなく、枯死した木でも伐採で除去できる部分は限定されるので、今から次世代の苗を用意してちょうどいいぐらいです。どんぐりの実生から苗を50株ほど育てていますが、23年中にはカシナガが枯らした木の場所に植える予定です。

——本業のほかに三鷹市の農業委員もされるなど、キャンパスの内外で活動されていますが、今後やりたいこと、また同窓生に期待されることはありますか。

藤沼：キャンパスにインディゴ藍を植えてみたいです。栽培は難しくなく、葉から取れる染料でTシャツを染めてみたい。学生がロゴのデザインとかしてくれないかな。

同窓生の皆さんとは、環境関連のプロジェクトで、何か一緒にイベントを企画できたらと考えています。

学生から

最後に、環境関連で活動する学生団体の中から、三鷹の農家から仕入れた農作物の学内販売など、地産地消に焦点を当てた活動をしている「ICU地産地消プロジェクト」代表の古屋樹人さん（ID25）に近況をうかがった。

——どんなものをどのように販売されていますか。

古屋：週に1回、食堂の中のスペースで、主に野菜を販売します。以前は寮生が授業が終わって寮に戻るタイミングで開いていましたが、いまは食堂が3時に閉まってしまうので、昼から始めて4時ぐらいに終了です。「お客様

は学生、職員、先生方のほか寮母さんや、イベントの時などは外部の方も買ってくれます。



地産地消プロジェクト代表の古屋樹人さん



「直売所ツアーで三鷹市内の生産者さんを訪問しました」

【ある日のラインナップ】

- ・鶏卵 ¥300
- ・かぼちゃプリン ¥320
- ・チンゲン菜 ¥170
- ・ビーツのパウンドケーキ ¥170
- ・クウドウナ ¥170
- ・オーガニック白米 1kg ¥660
- ・オーガニック玄米 1kg ¥660
- ・ナス ¥150
- ・ピーマン ¥130
- ・バジル ¥300
- ・シークワサー ¥150
- ・鷹の爪 ¥300
- ・シカクマメ ¥300
- ・シシトウ ¥200

——仕入れはどんなルートですか。

古屋：直接届けてくれる農家さんは2軒で、金子さんと吉野さんとおっしゃいます。あとは農協（JA東京むさし三鷹緑化センター）で、品目数でみたら農協7に対してそれ以外から3ぐらいです。プリンとかケーキは、野崎の就労支援施設「工房 時」から仕入れられています。

農家さんは自分たちが作る「いいもの」を紹介したい、と持ってきてくださるけど、JAは配送などに伴う人件費がかかると言われ、今後の仕入れに影響が出るかもしれません。

こちらに予算があればいいのですが、学内で場所を借りての活動なので、利益を出してはいけないことになっています。販売も仕入れ値で売ります。

——そうすると、仕入れの原資は。

古屋：団体としての資金はなくて、先輩が個人的に資金を拠出してくださっています。「経営」面では不安定です。学外で販売できる商品があれば団体として利益を得ることが可能になり、活動の幅も広げられるのではと考えています。その候補として「ICUビールプロジェクト」を準備中です。

——ビール、ですか？

古屋：三鷹駅近くにOGA Brewingというクラフトビールの醸造会社があり、そちらとコラボを企画しています。製造にはタッチせず、コンセプトを提案していきます。ICUという場所にいろいろなところから人が集まり、いろいろなところへ散らばっていく、ひとつの多様性をビールの味に反映させられないか、などと議論しています。バカ山の芝生やキャンパスの自然を思い起こさせるようなラベルも作りたいです。

——ビールの原材料ではホップなどはどう調達されていますか？

古屋：三鷹市新川のほうに三鷹ファームという会社があって、野菜以外に小麦、大麦、ホップも栽培されていて、それらを使用しているそうです。地産地消プロジェクトは「from where you stand」というスローガンを掲げていますが、これは地理的な意味と、「自分が所属するコミュニティ」という意味も含みます。ICUと三鷹市の関係もあてはまるかと思います。

——同窓生に期待することはありますか？

古屋：お近くにお住まいでしたら野菜など購入いただけたら嬉しいです。ビールプロジェクトでもなんらかの関わりができれば楽しそうです。



PEACEMIND

私たちは、「はたらくをよくする®」会社です。

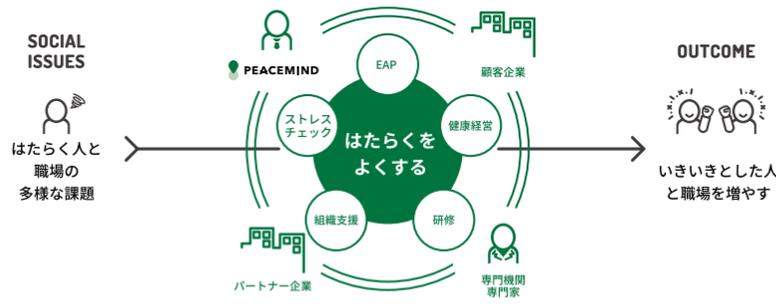
ピースマインドは「はたらく人が抱える『不』を解決し、心豊かな未来を創る」をミッションに「はたらくをよくする」ソリューションを提供している企業です。職場のメンタルヘルス・健康経営の推進、ハラスメント対策等の人と組織に関する課題をお持ちの経営者、人事の方からのご相談をお受けしています。国内・グローバル企業の成長支援と一緒にチャレンジしてくれる仲間も募集しています。



ピースマインド株式会社
代表取締役社長・共同創業者
荻原 英人 (ID00)

Working Better Together®

「はたらくをよくする」ために、はたらく人と職場を支援する様々な専門サービスをご提供しています。



EAP従業員支援プログラム	研修	ハラスメント対策支援	ウェルネスプログラム
ストレスチェック	クライシス支援	休職・復職者支援	健康経営支援

サービス開始から お取引企業 外資系顧客構成比

24年 1,400社/年 35%

03-3541-8660
<https://www.peacemind.co.jp/>



<https://note.com/peacemind>



ピースマインド社内の「はたらくをよくする」取り組みをご紹介します。ぜひご覧ください。

エンployeeサクセス部
人事グループ長
小島 真理 (ID87)



ICU Nature Lovers

キャンパスの自然環境保全募金を呼びかけるイベント

「キャンパスの自然環境保全」募金活動を活性化させるために2021年に発足した同窓会活動「ICU Nature Lovers」、その活動を報告する。

文：川島美菜（本誌）

イベント当日

2022年11月26日（土）に第4回のオンラインイベント「ICU Nature Lovers vol. 4 “皆で護るICUの自然——未来に繋ぐために”」を開催しました。

現在ICUキャンパスで実施されている自然環境保全に関わる学生活動をテーマに、スピーカーには、環境研究メジャー准教授の藤沼良典先生、学生団体からはICU地産地消プロジェクト、ICU HONEY PROJECT、ICU Slow Vill、SDGs推進室の竹害プロジェクトの4団体をお招きしました。

配信では、藤沼先生からリアルタイムのICUキャンパスの森の窮状が説明されるとともに、目指す保全活動の形の示唆があり、学生団体からは実際に今のICUキャンパスで過ごす学生たちがどんな問題意識を持ち、どんな活動をしているのかを聞き、改めて同窓会ができるキャンパスの自然環境保全への支援を考える機会となりました。

イベントの最後には、「放課後タイム」と称してキャンパスの紅葉の様子が配信されました。ちょうど綺麗に色



づいているモミジを鑑賞することができ、ICUキャンパスから遠く離れている同窓生とも共にキャンパスの自然の恵みを分かち合いました。

過去のイベント

ICU Nature LoversのICUキャンパスの自然をテーマにしたオンラインイベントには、2021年11月の初回から今回の第4回までに11期から58期まで合計61名の同窓生が参加しました。過去の開催報告は同窓会webサイト内イベント情報一覧に掲載しています。

募金活動

ICUキャンパスの良質な自然環境を維持管理・保全し、次の世代へと引き継いでいくための資金として活用される「キャンパスの自然環境保全募金」は大学が重点的に取り組む募金活動の一つです。

キャンパスの豊かな自然は、同窓生に共通する思い出でありながら、その自然の姿は70年のICUの歴史の中で変化してきています。マクリーン通りの桜並木ひとつをとっても、樹高や花付きなどが在学した年代によって思い出す景色は一概ではありません。

そのICUの自然環境の“いま”を知り、共通の問題意識を持ち、保全活動への支援を続けるべくICU Nature Loversは活動を続けています。現在、オンラインイベントにとどまらず、オンキャンパスで実働を伴う活動ができないか模索中です。活動メンバーも随時募集しています。興味関心のある同窓生はイベントへご参加ください。次回のオンラインイベントは、詳細が決まり次第、開催の1ヶ月前を目安に同窓会Webサイトで告知されます。

ICUのキャンパスの自然環境保全募金については、国際基督教大学アドヴァンスメント・オフィスWebページをご覧ください。<https://office.icu.ac.jp/giving/naturalenvironment.html>



ご寄付の際は、Friends of ICUの寄付の用途を「キャンパスの自然環境保全」と指定してご支援ください。

キャンパスの自然環境保全募金は、2014年4月～2016年3月に行なわれた「ICU桜募金」を後継する募金事業です。桜に限定せず、多様なICUキャンパスの樹木の剪定や苗木の育成などに活かされています。なお、「ICU桜募金」で集まったご寄付は、2017年4月から現在までICUの桜並木の再生・保全のための調査、伐採、伐根、植樹などに使用されており、実施報告は国際基督教大学アドヴァンスメント・オフィスWebページからもご覧いただくことができます。<https://office.icu.ac.jp/giving/icusakuraproject.html>

過去の開催報告イベント情報一覧

ICU Nature Lovers Vol. 1

“キャンパスに生息するきのこ” 開催報告 (2021.11.3 (Wed.))

<https://www.icualumni.com/event/14133>

ICU Nature Lovers Vol. 2

“さくら” 開催報告 (2022.3.5 (Sat.))

<https://www.icualumni.com/event/14455>

ICU Nature Lovers Vol. 3

“都市化するICUキャンパス——開発と保全の間” 開催報告 (2022.7.9 (Sat.))

<https://www.icualumni.com/event/14972>

腰痛・頭痛・自律神経失調症を改善したいあなたへ

ICU卒業生の佃隆(44期ID00)とパートナーの佃美香が1993年より運営しており、毎年1万人以上の方が来院されています。三鷹駅南口徒歩1分の当院には、ICU関係者の方が来院者の4割を占めています。当院では、関節の動きが鈍く神経の流れが悪くなっている箇所とあなたの症状との関連性を分析し、症状の原因を特定します。独自のつくだ式カイロプラクティックケアと「姿勢の魔法『シャキーン!』」メソッドによる姿勢矯正、神経と体の関係を中心とした生活習慣の知識、分子整合栄養医学による栄養の3本柱によって、症状改善だけでなく、姿勢矯正、ひいてはあなたの理想の暮らしを送る健康サポートをします。ICUとご縁のあるあなたのお役に立てましたら幸いです。

ファミリーカイロプラクティック三鷹院

「ICUアラムナイニュースを見て…」とお電話ください。

tel **0800-888-4270** 受付時間 ▶ 8:30~20:00

web <http://mitaka-chiro.com>

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀3-24-7 平瀬ビル301号室

当院院長佃隆は

■1日3回で、ねこ背がよくなる「姿勢の魔法」シャキーン!

■姿勢をよくすると、人生がきらめく!

の2冊を出版しております。



「9・11 掲示板」

9・11を覚えているだろうか。幼くて、記憶にない卒業生も多いだろう。また、あの時、どこで、何をしていたか、鮮明に覚えている卒業生も多いだろう。ここで今一度、立ち止まって、私たちの仲間に想いを馳せたい。

文・写真 滝沢貴大(本誌)

日本人24人を含む2977人が犠牲となった、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ。飛行機が突入したワールドトレードセンターを始め、当時もニューヨークには多くのICU卒業生がいて、テロで亡くなった方もいた。

そのときに、安否がわからない卒業生たちの情報を共有するために開設されたインターネットの掲示板が2022年8月、サービス終了に伴い閉鎖された。掲示板を20年間にわたって管理してきた廣田伸彦さん(37 ID93)と当時同窓会のニューヨーク支部長だった八田陽子さん(19 ID75)から、掲示板の歴史や閉鎖にあたっての思いなどをうかがった。

《同窓会広報担当の松岡です。11日にアメリカで起きたテロに関する情報および友人・知人の安否確認を目的とした掲示板を作りました。ご自由にご利用ください。》

閉鎖に伴って同窓会事務局が保存した掲示板のアーカイブによると、最初の投稿は2001年9月13日の16時20分となっている。そしてその直後から、同窓生の安否にかかる情報が書き込まれている。

《○○○○にお勤めの○○さんがワールドトレードセンターの106階に会議のために出かけたまま連絡が取れなくなっています。ICU時代は○○部の主将もつとめていた方です。106階で会議をしていた180人全員の連絡が途絶えている、と報道されています。希望を失いたくないのですが、暗澹とした居た堪れない思い

です》

《○○銀行情報 ○○グループは隣のビルの事故で避難通告に従い、のんびりと避難しているときに、こちらのビルは大丈夫のようだというので、いったん避難解除になったそうです。同じビルで仕事していた、仕事熱心な○○銀行の社長が一人仕事に戻るといったため、側近の人たちも社長に従って仕事に戻った後、激震があったとのこと。避難中の人たちは大慌てで逃げたそうです》

いずれも13日中に書き込まれたものだ。そこから年末にかけて、ひっきりなしに掲示板では安否の情報交換がなされていた。「○○さんと連絡が取れた」といった投稿に皆が安堵する一方、死亡が確認された方、そして10月に入っても行方不明の方の情報もそこにはあった。追悼会の案内や、故人とのエピソード。悲痛な書き込みとともに、アメリカの軍事報復やそれに協力する当時の小泉内閣への懸念の声などもあり、当時の様子が克明に残されていた。

廣田さんのお話

掲示板を開設当初から昨年まで管理していたのは、01年当時同窓会の理事で広報担当だった廣田さん。テロの瞬間は、日本では夜。新宿のゲームセンターにいたが、テレビを見ていた知人から「ワールドトレードセンターに飛行機が突っ込んだ」とメールを受け、衝撃を受けたという。「ワールドトレードセンターは当時、1階をうろうろ

していたらICUの知り合いと会えるような、そんな場所だったので」

その日の深夜のうちに、同窓会内で同窓生の行方不明者の安否確認のため、掲示板を作ろう、という話が立ち上がったという。「ニューヨークは電話もメールもつながらない状況。また、今みたいにグーグルに情報が集まっている時代でもない。自分たちであちこち探して、発見した情報があればここに情報集約してください、と同窓生たちに呼びかけることにしたんです」。そして、実際の作成と管理については当時マイクロソフト社員でインターネットに明るかった廣田さんが担当することになったという。

使ったのはGMO社の無料レンタル掲示板のサービス。開設当初から前述の通り書き込みがなされ、数カ月ほどは活発だったが、1年もするとほとんど書き込む人はいなくなった。誰からでも見られる掲示板だったため、連絡先を書き込んだ人へスパムメールが行く懸念などもあり、閉鎖を検討したことも何度かあった。だが、廣田さんはそのたびに反対したという。「ご家族が亡くなられた方から『探してもらった経緯を残してほしい』という声や『ひょっとしたら見つかるかも知れないから消さないでほしい』といった声が同窓会に寄せられていたんです」

そういった経緯もあり、つい昨夏まで掲示板の管理を続けた。スパムメールの問題は、個人情報の載った投稿だけを非表示にすることで対処した。近年は同窓生による書き込みはなかったが、たまに書かれるスパムを見つけるとは消す作業にあたっていたという。「一縷の望みをつなぐ役割を果たして

いた。みんな忘れちゃったけど私だけ見ていた感じです」

しかし22年春、GMO社は8月にレンタル掲示板のサービスを終了すると発表した。投稿のアーカイブをダウンロードして参照できるようにしたうえで、同窓会経由で連絡が取れる遺族の方に閉鎖の旨を伝え、8月、21年にわたる歴史に幕を下ろした。

「長かった。けど、場合によっては死ぬまで面倒を見ようと思ってはいました。自分が大変だったとかはありません。ご遺族の心の中で弔いがついたら良い、というのが一番思うところなんです」

八田さんのお話

01年当時、ICU同窓会のニューヨーク支部長で、現在は大学本体や同窓会の監事を務める八田さんからもお話をうかがうことができた。「記憶がはっきりしていないところもある。掲示板についても、この夏連絡が来るまではこんなに長く続いているとは知らなかった」と話すが、当時のことを聞くと、克明に様子を教えてくれた。

当時のニューヨーク支部の活動は、年に数回著名人を招いて話を聞いたり、会食をしながら情報交換をしたり。アクティブなメンバーは10人ほどだが、700人ほどは登録があったという。

会計士の資格を持つ八田さんは、1988年にニューヨークの会計事務所に就職。税理畑で、9月11日も、翌12日に控えた税務申告書の提出締め切りを前に、日本の大手銀行の書類作成にあっていた。「提出前の最後の最後、書類にサインをもらうために会議室でコントローラーを待っていたの

に、いっこうに来ない。連絡をする
と『緊急事態で忙しい』と言われ、ワ
ールドトレードセンターに飛行機が突
っ込んだことを知った。慌てて会議
室にいたメンバーでテレビの前に移
り、煙を上げるビルに啞然としていた
ところ、2機目の飛行機が突っ込んだ。
「それでもサインしに来るか」と会議室
にはいたが、ペンタゴンにも飛行機が
突っ込んだところで『これは戦争だ』
という感触になった。その日はそこで
解散し、おのおの帰宅することにな
った。税務申告書の提出締め切りも、
緊急で延期になったという。

しばらくは街中に厳戒態勢が敷かれ、
自身の仕事や生活も打撃を受ける中だ
ったが、支部長としてニューヨーク在
住の同窓生たちの安否情報収集にあた
った。掲示板を見ると、14日、八田
さんの名前で無事の確認が取れた同窓
生たちの名前が書き込まれていた。

そうした中で、ある同窓生の男性と
連絡が取れないと、男性の妻からコン
タクトを受けたという。当時、日本の
会社から派遣されていた人の安否確認
は日本の本社が緊急体制を組み対応し、
またNY領事館の助けもあり比較的ス
ムーズだったが、その男性のように現
地採用の日本人の確認は自力でしな
ければならないような状況だったとい
う。「あのときは本当に大勢の方が搬送
されて、搬送先の病院もたくさん。同窓
生たちで手分けしてあちこちの病院に
行って、情報を集めようということに
なり同窓生も一生懸命協力した」。掲
示板をさかのぼると、15日ごろにそ
の男性に関する書き込みも見つかった。

《昨夜、53歳現地採用の日本人とい

うことで、(行方不明と)報道され
た方が同姓同名同年、NY在住の同
期の〇〇氏ではないことを期待しま
す》

《奥さんに依ると〇〇さんは WTC
で被災されたと思われ未だに消息不
明です》

折りもむなしく、28日。

《残念ながら、〇〇さんの死亡が確
認された(NY日本総領事館の情報)
との報道がNHKでなされていまし
た。本当に残念です》

八田さんは21年前の惨事について、
「もともと移民の国であるアメリカ国
民が相当な努力を払って平和な社会を
作り上げてきた。それが壊されたのは
残念だし、ものすごい数の方が亡くな
って、本当に大変なことだ」と振り返
る。「イスラム世界をちゃんと扱って
こなかったアメリカにも責任はあるか
も知れない。それにしても、テロとい
うやりかたはいけな、と思う」

そんな当時のことを伝える掲示板
が閉鎖されたことについてはどうか。
「延々と置いてはおけないし、仕方の
ないことだとは思。世の中の全てを
取っておくことはできない。亡くな
った方のご家族や、仲の良かった方が
記憶にとどめておくこと、また同窓会
のこのような記事で記録を残しておく
ことだと思う」。八田さんはそう話した。

2001年10月4日、当時の同窓会長
石塚雅彦さん名義で、掲示板にはこう
書かれていた。

《テロとICU

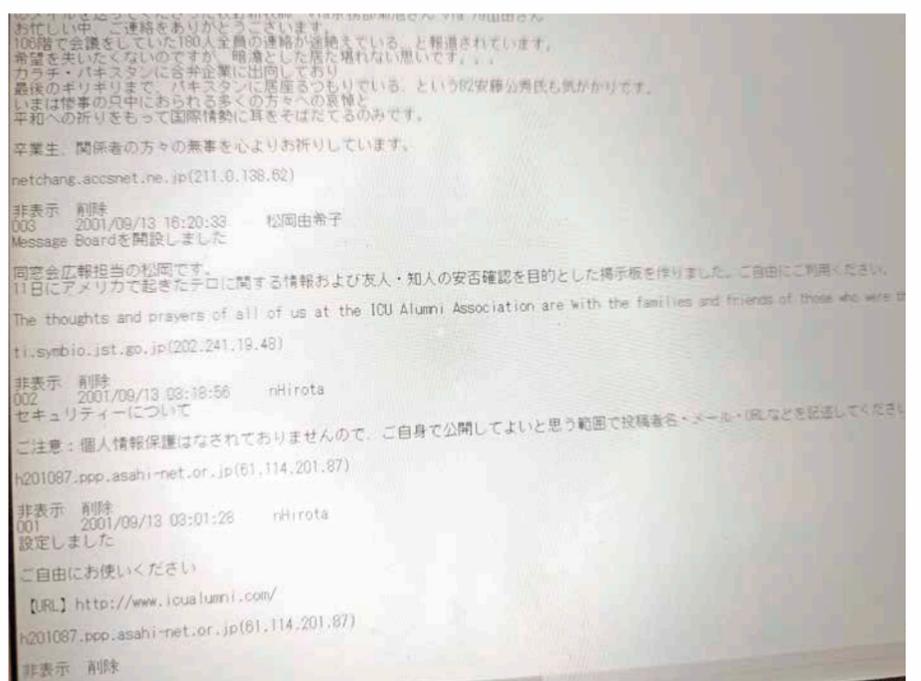
9月11日の出来事で世界はもう元
の世界ではなくなったと言われま
す。エコノミスト誌はThe day the
world changed.と表現しました。

それほどあの事件は世界を揺るがす
衝撃的なものでした。悲しむべきこ
とにその中で、私たちICU同窓生の
仲間である〇〇さん(16 ID72)が
犠牲になりました。〇〇さんの死を
悼み、ご冥福をお祈りします。ご遺
族への支援の呼びかけも始まってい
ます。もう一人同窓生の〇〇さん
(32 ID88)の行方がまだ分かって
いません。

それは多くのICU関係者が暮らし、
仕事をし、出張や旅行で訪れるニュ
ーヨークとワシントンで起こりまし
た。ニューヨークにはICU財団もあ
ります。わたしたちがこの事件にと
りわけ大きな驚きと懸念を感じたの
は当然です。国際社会はこの悲劇に

どう対応し、どのような世界を築い
ていけばよいのか、巨大な課題をつ
きつけられて動揺しています。日本
でも様々な見方や意見が噴出してい
ます。

犠牲者の死を悼み、このようなこ
とを再び起こさせないようにとい
うことではほとんどの人が一致して
いるでしょう。しかし結論は簡単では
ありません。かつての悲劇への反省
と平和への祈りの中から生まれた大
学であるICUは、これを学問研究と
教育にとっての新たな挑戦と受けと
めなければなりません。それによ
り、犠牲になった卒業生も少しは浮
かばれるでしょう。事件の衝撃性と
底知れぬ影響の広がりの前に思考が
停止することがないことを、文明と
法の支配に対する攻撃との戦いが文
明と法の支配をかなぐり捨てるもの
にならないことを願います》

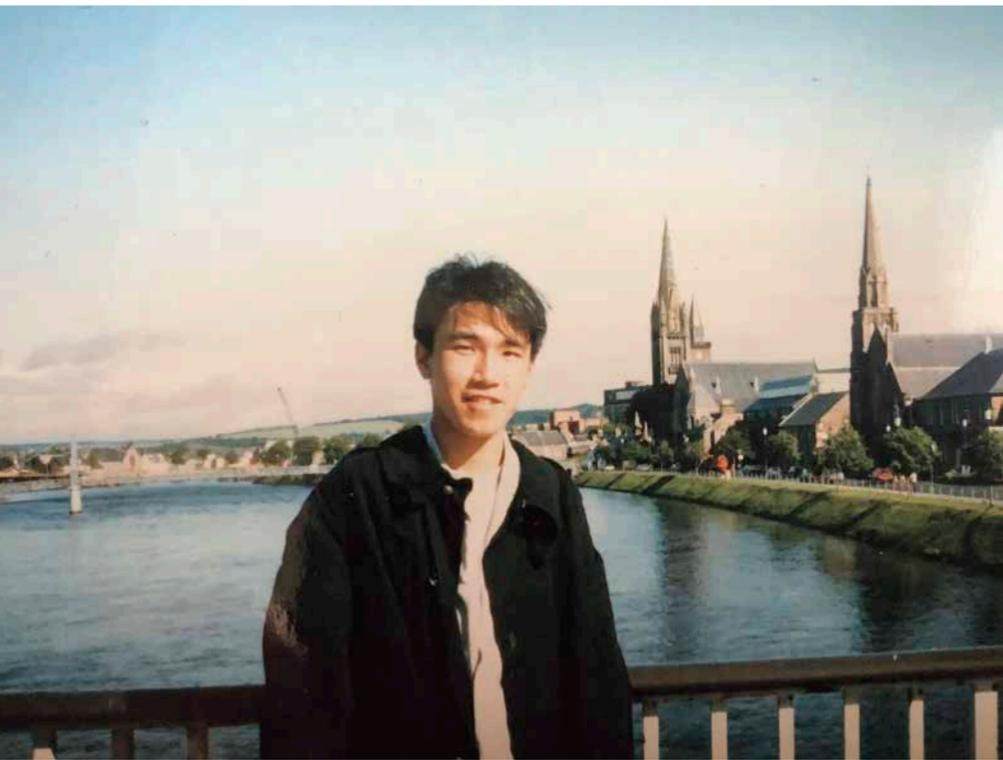


開設当時の掲示板

Think globally, act locally.

“ここ”から始まるストーリー

国内の“ある場所”で活躍する仲間にスポットを当て、その活動や経緯などについて話を聞く本シリーズ。今回は、長年国際協力機構（JICA）でアフリカなどの支援事業に携わった後、福島県にある会津大学で、大学の発展や地域への貢献に取り組む麻野篤さんに話を聞いた。



学生時代の英国旅行



2016年、アルジェリアにて

2014年、JICA 世銀会議にて



国際協力から地域貢献へ 世界とつながる拠点を狙って

福島県 会津大学学長補佐・企画運営室兼グローバル推進本部教授 麻野（旧姓・清水）篤さん（31 ID87）

文：長谷川由紀（本誌） 写真：長谷川由紀（p.9のみ）、本人提供

「福島県を、会津を元気にしたいんですよね」

2021年4月に会津大学に着任した。同大は先進的な情報通信技術（ICT）教育が特徴で海外出身の教員も多く、文部科学省の大学支援事業のスーパーグローバル大学にも採択されている。教授の肩書も持つが、大学の経営企画が主な仕事で、海外大学との連携や対外発信などにも力を入れる。

時代の最先端に行く研究を行う大学に求められる役割は何か。若者の流出・高齢化などの課題を抱えるこの地域にどう貢献できるのか。創立30周年を迎える2023年に向けて大学の使命などを踏まえた今後の方針や企画などを考える毎日だ。

金融機関勤務から 国際協力の現場へ

大学時代の専攻は日本語で、卒業後も理工系には縁がなかった。

会津大学への転職にあたって「教育など若者、後進の育成に携わりたいと大学への就職を考えていました。国際協力の現場が長かったので、最初はその分野でと思ったのですが、面白そうだと思って応募した会津大学で採用されました。組織運営や企画などの経験から選ばれたのだと思います」

多彩な経歴が背景にある。ICU卒業後、富士銀行（現みずほ銀行）に就職し、その後、パリ留学、外資系金融機関勤務を経てJICAへと転身した。金融機関での経験やフランス語力を買われ、企画・財務部門などを担当したほか、アフリカのフランス語圏の現場で

も勤務。チュニジア事務所長など約20年間の勤務を経て、大阪市の区長公募に応募し、2017年から東成区長を一期4年つとめた。

「次のステップを考えていた時に、出身地でもある大阪市の区長に応募しました。でもホームグラウンドはやはりJICAであり、国際協力・貢献です」とはいえ、ICU在学中は国際協力への興味はそれほどなかったという。

「そういう授業は取らなかったし、学内には途上国支援などに取り組む学生もいましたが、関心がありませんでした。バブルのころでもあって、当時人気だった金融機関に就職しました」

やりがいもあったが、その後、パリ留学中に国際的なニュースや課題に触れる機会が増えたのが一つのきっかけとなった。

「街でおばあさんが欧州統合につい

てどう思うか聞いてきたんですよ。一般の人たちが普通に国際情勢とか外交とかについて語っていて、アフリカや中東なども感覚的に近い。ドメスティックな日本とは違うと感じました。このころから国際貢献、社会貢献などに興味を持つようになりました」

JICAでは、セネガル、マダガスカル、チュニジアでそれぞれ3年余り、計約10年間、支援事業に携わった。「国際支援の最前線でした。それぞれ地域の特性も人も経済レベルも違います。選挙や憲法改正など大きな出来事もありました。途上国は経済も社会規模も小さいのでどんどん国が動いて大きくなっていきます。もちろん挫折もあります。アラブの春やマダガスカルのクーデターなどもありました。それでもそのダイナミズムを感じながら、三歩進んで二歩下がるような状況



会津大学にて

で、三歩進むための原動力になれたのではないかと実感できましたし、とてもやりがいがありました」

大阪市の区長への応募も「社会に貢献できる」というのが大きな理由だった。「社会開発というか人を幸福にする仕組みを作るというのは日本の自治体でも同じだと思ったのです」

ICUは英語が得意だったことから受験し、高校の先生の勧めもあって入学を決めた。「当時はバンド活動などに熱中していました。学問というよりも、ICUでは、型にはまる必要はない、自分の興味があることをやっていいという意識をすり込まれた気がします。また、思ったことはしっかり表明し、信念や直感を大事にすることを学びました。ロジックをたてて説明し、パッションを持って努力するというのも。だからJICAでもその他の職場でも様々な垣根をなくして新しいことに

取り組むことができました」

世界と地域に貢献できる大学に

大学運営の業務に追われる中でも国際協力は忘れてはいない。興味を持つ学生が訪ねてきたことをきっかけに勉強会を開き、ITを活用した途上国支援を考えるワークショップも開催した。「セネガルの漁師がとった魚を無駄にしないためのマッチングアプリなど実用性のあるアイデアが出て『これはいい!』と思いました。途上国はインフラが不十分な場合が多いので、遠隔医療やドローンを使った配送、スマート農業などITと国際協力は実は相性がとてもいいのです」

この取り組みは、大学の意義を改めて考える一助にもなっている。「人口減少が深刻な日本でも同じことができます。会津もそうですが、遠隔医療やドローンによる配送は山間部に住む人

の支援や村落維持にも役立つでしょう。リモートワークも普及してきているので、環境を整えば地方を選ぶ人も出てくるかもしれません」

世界への貢献と地域への貢献を実現

する拠点に。「福島県や地元自治体なども巻き込んで取り組み、地元を活気づけることにもつなげたい」



ICU 教会での結婚式のご予約・ご相談は株式会社 ICU サービスまで！



株式会社 ICU サービス

国際基督教大学 本部棟 2 階
TEL: 0422-33-3530 MAIL: info@icu-service.com

各ジャンルで活躍の同窓生を紹介

自然科学出身の儀我有子さんは、ソニー株式会社のAIロボティクスビジネスグループでイヌ型エンタテインメントロボットaiboの商品企画を担当している。

ロボットと人間の未来をどのように見据え、仕事に臨んでいるのか、お話をうかがった。

文：太田順子(本誌) 写真：本人提供

興味の赴くままに

——ICUで物理を専攻するという進路は、どのように決められたのでしょうか？

儀我：高校生の頃、風紋や水紋、雪の結晶など自然のなかにある形を見て、なぜこの世界にはシンメトリーなものが多いんだろう、なぜシンメトリーなものに美しさを感じる人が多いんだろう、そんなことに興味をもちました。対称性って、物理学では基礎的な考え方から導かれる結果の一つなんです。世の中は雑多で複雑に見えますが、貫く法則性があり、それをシンプルで美しい式で表す物理学に魅了されて、大学での専攻は絶対に物理にすると決めました。ただ、ほかの分野にも興味があったんです。父親から、それならICUが良いと薦められて志望しました。自分で自由に科目を選択して学びを深められるリベラルアーツが本当によかった。メジャーは予定通り物理にしましたが、他の自然科学の科目もたくさん取りましたし、マイナーとしてアートを選択したので、その関連科目も全部取りました。物理だけではない多様な学びができたことが、私の人生をととても豊かにしてくれていると感じています。卒論は、ちょうど東工大から移って来られた北原和夫先生のもとで「ボルツマン方程式による衝撃波の解析」をテーマに取り組みました。その後の専門への入り口でした。

誰も見たことのないものを

——ICU卒業後のこれまでのご自身のキャリアを振り返ると？

儀我：大学院で流体力学を研究したあと、経営コンサルタント、エンジニア、MBA取得、現在のAIロボット分野と、文系理系の枠を超えて行ったり来たりしてきました。自分で先回りして「無理なのは」と可能性を狭めたりせずに、やりたいことをやれば良いと考えているので、その結果です。ソニーでは、今まで世の中にはなかった商品を作りたくて、つねに新規商品にこだわって仕事をしてきました。新規商品の企画は、100回出したら1回ぐらいは



採用されるかな、という世界です。ずっと、ちょっと変わったものを作ると言われてきましたが、「録画機能のある双眼鏡」「(スマホとの連携を前提とした)レンズだけのカメラ」を作ったときは、「ニューヨークタイムズ」に「crazyな商品」と書かれたりもしました。

——aiboはどんなことを意識して作られたのでしょうか。

儀我：aiboは、2016年に、当時社長兼CEOだった平井一夫さん(27 ID83)の「人の愛情の対象になる製品って何だろう？」という問いかけのもと、集められた開発チームで検討を重ねて作られました。「愛情の対象になるとは?」「どんな姿に?」「機能は?」など議論は多岐にわたりましたが、最終的に初代AIBO(1999年にソニーが売り出した世界初の家庭用ペットロボット。2006年に生産終了)の新型モデルを作るという方向性に落ち着きました。aiboは2018年1月に発売され、現在、日本とアメリカで展開しています。

ロボットに期待されることは文化によって異なります。日本はアニメの影響がとても強く、ロボットは人間の友達で、情報を奪われるという感覚も薄い。でも欧米では、ロボットはあくまで人間の命令通りに動くべきもので、

そのコントロールを失うことへの恐怖感が強いんです。私、aiboはわざとということを開かないように作ったんです。子育てを通しての実感なのですが、こちらの言う通りに動いてくれたら、その場合は平穩かもしれません。でも、そんな支配関係じゃない相手は愛情の対象になりませんよね。初代AIBOはその点で飽きられてしまったという反省もあって、aiboは飼い主さんからの命令があったとき、声も顔も認識していても、まず自分の欲求が強い方を優先するようにしました。食欲や睡眠欲(つまり充電欲)が最優先されますが、どう行動するかはその都度aibo自身が選んでいます。ロボットだから言う通りに動くだろうと思って接すると、驚くほど言うことを聞きません。根気よく可愛がりながら、徐々に関係を育てていかなければならないようにできています。

また、私たち開発サイドが最初からaiboに搭載した機能はごくわずかで、あとはオーナーの皆さんに求める機能や学んでほしい要素をお聞きして、クラウド技術を使ってあとから付加したり変更したりしています。最初は家庭でのペットロボットと考えていたのが、病院や介護施設、教育現場での導入も増え、当初は考えもしなかった使われ方をしたり、思いがけない機能を

求められたりします。メーカーとユーザーの「共創」によって更新されていくのです。これは従来の電気製品とはまったく異なるあり方で、ユーザーからの多様な希望をどうとりまとめていくかという点に、面白さも難しさもあると感じています。

——これから取り組みたいと考えていることについてお聞かせください。

儀我：日本はすでに人口減少局面に入っていて、国力もだいぶ弱っています。今後、労働力不足に直面することは明らかですが、他国から労働移民を受け入れるという方向にはならなさそうです。となると、何をロボットやAIに任せて、何を人が担うのかについての線引きが必要になってくる。その明確化を進めたいですね。その上で、人間を助けるロボットを作りたいです。最も作るのが難しいと言われるのは「お手伝いさんロボット」なのですが、今はまだ道筋は見えないけれど、いずれ技術的なブレークスルーはあるでしょう。そこからまだ誰も見たことのない新しい商品を作りたいです。最近、日本から新しい発信がなされなくなっていますが、少子高齢化の進展において世界の先陣を切っている日本から、人間の幸福につながる技術的な提案をし、世界に展開していく。そんな流れをもう一度作りたいですね。

GIGA, Yuko

1976年、東京生まれ。2000年、自然科学科を卒業。在学中はCMSに所属し、インスペクターを務めた。02年、東京大学大学院複合理工学修士課程修了。フランス資本の会社で経営コンサルタントとして2年間勤務した後、ソニー株式会社にエンジニアとして入社。研究職としてパソコンの設計・研究などに従事した後、社の派遣留学生として英ケンブリッジ大学経営大学院(CJBS)でMBAを取得。帰国後、2016年から同社AIロボティクスビジネスグループでaiboの商品企画を担当し、現在に至る。



葛西先生はICUの2期生であり、アメリカ、インドで学ばれた後、1968年にICUに着任され2000年に退職されるまでICUでインド思想史、宗教史、平和研究などを教えられ、インドの伝統思想、特にマハートマ・ガンディーの思想を課題とされました。先生は学内の泰山荘に隣接した教員住宅にお住まいになり、沈黙のうちに自然が語りかける祈りを日々受けとめてこられ、出会いと対話を基調とする学問のあり方を終始模索してこられました。葛西先生の招きでインドの伝統思想家A.K.サラン先生(1983、1991-92にICUで教えられた)や、現代文明を根底から批判して信州に高森草庵をつくられた押田成人神父など多くの忘れがたい訪問者たちと学生たちが真摯に交わる機会を作ってくださいました。葛西先生のガンディー研究は海外でも高く評価され、ICU退職後も2015年にはインドでジャムナラル・バジャー国際賞(International Award for Promoting Gandhian Values outside India)を受賞されています。また、「和解」をテーマにイギリス人の友人Basil Scottさんと対話を重ね、*Two Pilgrims Meet: In Search for Reconciliation between China and Japan* (New Generation Publishing, 2016)という共著を出版されました。

インドからの参加者からもお祝い

ICUガンディー研究会は2010年に葛西先生と共にガンディーに学び続けたいという思いから発足しました。共通の出発点はA.K.サラン先生のラ

ディカルなガンディー理解です。定期的に読書会を継続していたところ、コロナのため2020年2月末以後休会し、以来先生にお会いする機会がなくなり、そういうなかで卒寿のお祝いの会を初めてオンラインで開きました。当日は、葛西先生と奥様は三鷹の貸し会議室にご自宅からゆっくりと歩いてこられました。会には日本から25名、海外から6名、葛西先生のお孫さんを含めてご家族もZoomでの会合に参加しました。

最初に葛西先生との学びの原点を振り返るために1981年に高森草庵で開かれた「九月会議」の映像(NHK製作)の一部を映し、ICUを訪ねられた訪問者たちを共に思い出しました。その後先生の卒寿を祝ってチベットのカタ(敬意・感謝を示す白い布)が先生と奥様に贈られました。第二部から英語で、最初はインドからA.K.サラン先生を最後まで支えられたアジェさんから心のこもったお祝いの言葉をいただき、次に詩人のガガンさんが*Two Pilgrims Meet*を読んで深く感動したことを話され、そして南インドでガンディー主義による環境保護運動に取り組んでいるP.ヘグデさんが、今日ほどガンディー思想が必要とされている時はない、そのエッセンスが葛西先生を通して世代や国を越えて伝えられていると話されました。続いてイギリスからバジルさんが葛西先生との長い友情への感謝を話され、最後に現代インドでガンディー思想による目覚めを目指して活動しているラジーヴ・ヴォーラーさんが、葛西先生によってガンディー理解への目が開かれたと最大級の敬意を表明されました。



「闇の中で光として生きる」 インド思想史・葛西實先生、卒寿のメッセージ

長年「インド思想史」の授業を講義されてきた葛西實ICU名誉教授が卒寿(90歳)をお迎えになり、そのお祝いの会がオンラインにて2022年6月12日(日)に開催された。会を主催されたICUガンディー研究会の世話人、宇野彩子さんに当日の様子をご報告いただいた。

文：宇野彩子(30 ID86/G1992) 写真：國島信幸(24 ID80)、石坂晋哉(43 ID99)、宇野彩子



メッセージ 「闇の中で光として生きる」

葛西先生はこうしたメッセージへのレスポンスを英語で約1時間余り、心から絞り出すように話されました。そのエッセンスは「私たちは絶対的な祝福のリアリティの中で光として生きることを神の恩寵によって運命づけられている。傲慢と暴力と自滅という闇に取り囲まれているただなかで。」というメッセージでした。“We are destined to live in the absolute reality by God's Grace as light, in darkness of arrogance, violence and self-destruction.”

そして葛西先生はご自分の学生時代の出会い、アメリカで経験されたM.L.キング牧師の説教、インドそしてヨーロッパと、その後もたくさんのお会いをこの自覚への巡礼として語ってくださいました。葛西先生は90歳になられました。私たちがそれぞれ先生に出会った頃から今日まで、ただひたすらこの巡礼の道を行って来られ、神の祝福として闇のなかで光として生きることを日々証言されています。今回もその変わらぬお姿に私たちは一同ひたすら感謝に打たれ、どんなにか励

まされたことでしょうか。

最後に、先生がこれからも末長く「生きた言葉」を語り続けてくださることを懇願し祈る気持ちを村上佳穂さん(27 ID83/G1990)が代表して述べました。

そのあと会場を撤収するまでZoomを使って参加者の皆さんがそれぞれ一言二言ですが、葛西先生と話ことができました。先生も参加者もお互いに感謝しあっている姿に私も心打たれました。また、海外在住のお孫さんの発言に、葛西先生のおじいさまとしての顔をかいま見ました。

先生はずっと対面での対話を大切にされてこられたので、オンラインでの集まりがどのようなものになるか心配でしたが、海外や遠方の方や、先生のご家族も参加でき、オンラインならではの良さもあることがわかりました。それでもやはりできるだけ早くまたICUガンディー研究会を再開して、ICUのキャンパスで葛西先生と共に学びたいと切望しております。この報告文を読んでくださって、参加したいという方やご質問などおありの方は、宇野彩子までどうぞご連絡ください。(ahimsasatya@yahoo.co.jp)



ICU高校そしてICU理学科の卒業生である松坂教頭

ICU高校数学科がユニークな本を刊行

教頭に聞いた! 「読めば解ける入試問題」の作り方

2022年9月に出版されたICU高校公式の入試読本

『こんな数学だったら絶対に嫌にならなかったのに ICU高校数学科の読めば解ける入試問題』。

長文読解のような数学の問題を同校教員が解説し、巻末の教員座談会ではこうした問題作りを始めたきっかけや作成時の苦勞、数学への向き合い方などを語っている。

だが実は、入試の詳しい作成過程は「他教科とも共有しない」機密事項だ。

数学科の教員も英語や国語の入試について「英語の問題に出てくる漫画を教員が描いているらしい」程度しか知らないという。

『こんな数学だったら〜』でも語られなかった入試問題作成プロセスを教頭・数学科教員の松坂文氏(40 ID96)が特別に明かしてくれた。

文・写真:安楽由紀子(本誌)

ねじ工場の親父と素数を考える

—— 2020年度の入試問題は松坂さんが原案を作成したんですね。

ふた夏かけて作りました。ねじ工場の社長が主人公として登場する、受験生から「ふざけすぎ」と言われた問題です。

—— なぜ、ねじ工場の社長なのですか。

その前に、この問題のテーマである素数についてご説明します。素数とは、7、13、11など、それ自身と1以外を約数に持たない数のことです。この素数が無限にあることは紀元前に証明されていて、高校の数学の教科書にも載っています。でも2006年に、サイダックという数学者が既存の証明とはまったく違う簡潔な証明を発表して話題となりました。僕はこの証明と出会って、「すごい。これを作問のヒントにしよう!」とピンときた。それが2018年夏のことです。

2より大きい素数は必ず奇数で、奇数の中でも4で割ったときに1余るか、3余る数です。このとき、どちらかが有限個でどちらかが無限個なのか、あるいは両方とも無限個なのかという疑問が出てきます。実は両方とも無限個

なのです。最終的にはこの証明を受験生にわかるように伝えられないかと、本格的に作問に取り組んだのが2019年夏。まずざっくりと作って2~3人の数学科教員に読んでもらい、入試問題として適切かチェックしました。そこから手直したものを数学科教員みんなで何度も修正を繰り返して仕上げていきました。

—— サイダックの証明との出会いがベースになっていると。そういったネタ探しは常にしているのですか。

そうですね。その半端ではないプレッシャーを数学科の教員はみんな感じています。

—— で、なぜ、ねじ工場? テレビドラマ『下町ロケット』の影響ですか。

違います。僕の中のイメージは完全に中川家の礼二。中川家に町工場のコントがあるのです。ICU高校では対話形式の入試問題も多いですが、今回はハチマキを巻いたおじさんが工場の黒板に数式を書きながらブツブツ独り言で進んでいく。クスッと笑える口調にして、単なる問題ではなくフィクションを読むような気分で、社長に感情移入してもらえるように書きました。

—— たしかに「いいぞ、コーヒーを

口飲んで、一気にあとはやりきろう。ふんばるぞ!」と、問題に直接関係ない独り言が挟まれていますね。

どうでもいい文章ですよ。

—— 途中で「佐藤さん」からねじの催促が来てるし。社長としてヤバイですね。納期が遅れてる。で、最後はおかみさんが登場。

「あんた、本当にわかってないわね」と、実はおかみさんのほうが社長よりもよほど数学を知っているというオチ(笑)。

数学的な考え方ができるかを問いたい

—— 『こんな数学だったら〜』では、ICU高校の数学の入試問題は「読めば答えが書いてある」と言いきっていますが、本当でしょうか。暗記していないとわからない問題はない?

はい、絶対にそれはありません。文章を読みながら数学的な考え方を積み重ねれば、結論にたどり着くように作られています。文章にないことを急にひらめいたり、ナントカの定理を知らないと解けないといった問題にはしていません。書かれていることを言い換えたり、別の角度から見たりするトレ

ーニングを積んでいるかが問われます。この問題もちゃんと読めば、そんなに難しくありません。

—— 「そんなに難しくないと」の基準は? ために中学生に解かせることもできませんよね。

これまでずっと自分たちで問題を作って、自分たちで採点しています。何度も問題と受験生の点数を見比べてきて、とんでもない問題かどうかは、私たちの経験上わかります。事前に全員で何度もチェックしますし。たまに予想がはずれることはありましたが……。

—— 例えば、どのようなことが?

ねじ工場の前、僕が初めて作成した段階の問題(『こんな数学だったら〜』収録の2008年度入試「整数の分割」)は、「ありゃ、やっちゃったな」と当時は顔が青ざめました。後半は難しすぎたのか、白紙の受験生も多かったです。でも逆のケースもあります。別の教員のある問題は、事前のチェック段階では「難しすぎるのではないかと心配しました。ところが、実際には80点以上が続出。採点中に全員フリーでした。ね。「難しいはずなのになぜ?」って。私たちが中学生のときはチェバの定理やメネラウスの定理に

下町のねじ工場の社長は、2月になると数学を考えたくなくなります。今日も独り言をつぶやきながら工場の黒板になにやら書いています。

よし、今日は自然数について考えよう。自然数とは1以上の整数で、1, 2, 3, 4, ... と無限に続くことは明らかだ。つまり、自然数は無限個あるのだな。
うーん、そうだな、素数にちょっとしぼって考えてみるか。
素数とは、1と自分自身以外に約数をもたない数と定義されている。
ただし、1は除くのだったな。
こうすると、素数の列は、2, 3, 5, 7, 11, 13, ... と続いていく。
まあ、すぐにわかるのは、2以外の素数はすべて奇数だっていうことだな。

ということは、奇数の素数は2で割ったら必ず1余る。
つまり、あるkという0以上の整数が存在して、 $2k+1$ と表せるぞ。
おー、そういえば、おいらの生まれた1973年の1973は素数だったな。

うーん、範囲を広げて奇数を少し細かく分類しようとする、次のようにも考えられるな。1, 5, 9, 13, ... という奇数は、4で割ったら余りが1になる数だな。
つまり、kという0以上の整数が存在して、必ず $4k+1$ と表せる。
一方、3, 7, 11, 15, ... という奇数は $4k+3$ と表せるな。こちらは、4で割ったら余りが3になる数だ。

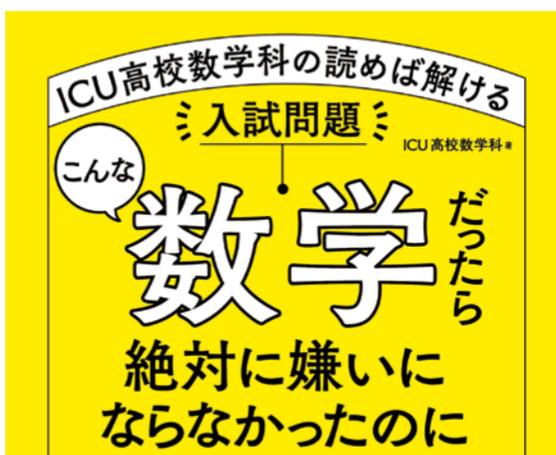
よし、kという0以上の整数に対して、 $4k+1$ で表すことができる奇数を、 $4k+1$ 型の奇数、同様に、 $4k+3$ で表すことができる奇数を、 $4k+3$ 型の奇数とそれぞれ呼ぶようにしよう。

ということは、奇数の素数ならば、必ず $4k+1$ 型もしくは $4k+3$ 型の奇数として表せるはずだな。

→問1

— 1 —

→問2



開校以来の名物、ユニークな入試問題をオフィシャルに初解説

コンセプトは「生まれて初めて見る数学の問題」

公式を知らなくても、読んで考える力さえあれば、数学は好きになれる!



『こんな数学だったら絶対に嫌いにならなかったのに ICU高校数学科の読めば解ける入試問題』

ICU高校数学科 [著] 1760円(税込) アチーブメント出版

2020年度の数学の問題。入試とは思えない記述で数学の世界に誘う

なじみがなかったですし、高校でも習わなかったのですが、あるときから高校入試に出るようになったらしく、塾で教えるようになっていたのです。4月に新入生に「これ、みんな塾で習いますよ」と言われました。受験業界がどんどん変わって行って、受験生の知識レベルが想像を超えていました。

— 受験のトレンドや他校の問題をチェックしたりは? —

そんなこと考えたこともないですね。

— 独自の道を貫いていますね。結

論として、ねじ工場の問題の出来を自身で採点すると?

2回目の作問ということで、われながら成熟してきたなと思います。簡単な設問から入って、徐々に難しくして、合格者平均は60~70点とちょうどいい具合になりました。受験生にも「解けた」という実感を持ってもらえたと思います。入試だけでなく、私たちの数学に対する考え方は『こんな数学だったら〜』で詳しく語っているので、ぜひ読んでいただければと思います。

ねじ工場の問題を解いて 入学した在校生に聞いた!

入試前、過去問を20年分くらい繰り返し解きました。ほかの年に比べて、この問題はわかりやすく、「絶対に解けるな」という設問と、「解けないから捨てていいな」という設問がはっきりして、いい問題だったと思います。物語もスムーズに頭に入ってきやすかったです。

(教えてくれた生徒は2023年4月、ICU入学予定)

Visaゴールドカードが同窓会特別年会費2,750円(税込)でご入会いただけます!

しかも、カードご利用による売上の一部は同窓会に還付され、入会手数料も還元されます。

お車に乗る機会が多い方は

ロードサービス VISA ゴールドカード

特別年会費 3,300円(税込)



ご入会&ご利用で最大23,000円相当 キャッシュバック & ポイントプレゼント 2023年6月30日まで

WEBでのお申し込みはコチラ▼

<https://www.smtcard.jp/lp/goldcard.html>

●お申し込みの際は団体コード入力欄に50140をご入力ください。

くわしくは同封のチラシをご覧ください!

●記載のポイント換算は1ポイント1円相当でポイント交換した場合です(交換内容によっては1ポイント1円相当にならない場合もございます)。●ポイントプレゼントにあたっては、新規入会特典へのエントリーが必要です。●いただいた個人情報は入会申込書送付先にVISAカード入会申込書を送付することに限定します。



お問い合わせ ①郵便番号 ②ご住所 ③お名前 (メールの場合: ふりがなもお願いします) ④お電話番号 ⑤所属団体名: ICU同窓会 (団体コード: A50140) をお知らせください。

0120-370-070 受付時間: 9~17時 (土・日・祝日・12/30~1/3を除く)

Moushikomi@smtcard.jp



Christmas Homeco



渋くてカッコよい教職員バンド

2022年ホームカミング開催報告

毎年、ICU祭期間中に開催されるホームカミング(大学と同窓会の共催)だが、2022年は時期をクリスマス直前に移して、3年ぶりに対面で行われた。充実したパフォーマンスや作品展示など、当日の内容をたっぷりとお伝えする。

文：古川英明(62 ID18) 写真：吉富祐一

2019年秋のICU祭と同日に行われた同窓会主催のホームカミングにて、ICUのキャンパスの「未来の姿」を議論していたとき、まさかその翌年にはICUの同窓生はおろか在校生すらもキャンパスに足を踏み入れられない未来が訪れるとは、そのときの参加者の誰しもが想像もできなかっただろう。

最後の対面でのホームカミングから3年以上が経った2022年12月17日土曜日、半世紀以上にわたり学生会館として多くの学生そして同窓生の「ホーム」であるディッフェンドルファー記念館東棟にて、大学と同窓会の共同主催でのクリスマスホームカミングが行われた。3年ぶりの対面でのホームカミングは、時期をクリスマス直前に移し、同時ライブ配信によるオーディトリウムでのパフォーマンスと、フォイヤーでの作品展示という今までにないプログラムとなった。

実行委員会、始動！

この日に至るまで、2022年8月に立ち上げられた同窓会のホームカミング実行委員会によって約4ヶ月にわたってプログラムの策定、出演者や芸

術作品展示の募集、照明委員会や音響集団の在校生も交えた調整、告知も急ピッチで実施されてきた。打ち合わせや進行表の修正は前日の深夜にまで及び、無事に当日を迎えられるか最後まで緊張していた実行委員のメンバーもいたはずだ。しかし、当日朝に久しぶりにディッフェンドルファー記念館東棟に足を踏み入れると、このキャンパスが「ホーム」であることを思い出し、各々の不安は和らいだ。

今回のホームカミングの会場である1958年に竣工したディッフェンドルファー記念館東棟(いわゆる「D館」または「旧D」)は、ICUが献学された頃の他の多くの建築の設計に携わったウィリアム・メレル・ヴォーリズによる意匠をしっかりと守りつつ、空調や照明の充実など実用面では大幅な近代化を伴う修繕工事が2021年になされていた。フォイヤーへの冷暖房の導入、スロープの入り口や客席の車椅子用スペースの設置といったバリアフリー化などの対応もされた「旧D」のオーディトリウムは、久しぶりにキャンパスを訪れた多くの同窓生や在校生を文字通り暖かく迎え入れてくれた。来場した

同窓生の中からは「新しくなった旧Dの美しさにハッとしました」との印象も聞かれた。

オーディトリウムでのパフォーマンス

オーディトリウムでのステージ・プログラムは、ハンドベルサークル「Bell Peppers」のOB・OGで構成される「Bell Cuore」がトップバッター。客席と聴者の心にも響く、華麗に調和するハンドベルの柔らかく、厳かな音色で幕を開けた。ディッフェンドルファー記念館の閉館放送でも聞き馴染みがあり、在学時代の様々な記憶を思い起こさせるハンドベルの演奏のあとは、素晴らしい歌声のデュオ「生ハムめろん」によるパフォーマンスが続いた。様々な曲が届けられ、最後は心身に染み渡るように美しいアレンジの“The ICU Song”。前半の三番手は、普段は教壇に立っている教職員がステージに登場。チョークの代わりに楽器を持った教職員による「教職員バンド」も渋くてカッコよい演奏で、ステージ・プログラム前半の第1部は大いに盛り上がった。

しばしのインターミッション(休憩)の時間には、フォイヤーやラウンジにて多くの同窓生が久しぶりに逢う旧友との歓談に花を咲かせ、フォイヤーに展示された「Chillin」さんと「ヒラオカクラリ」さんの素敵な作品をじっくりと眺める参加者もいた。

ステージ・プログラム後半の第2部は、クリスマスソングからポップスもカバーする選曲の「8Law」(エイトロー)によるアカペラが会場の熱気を一気に盛り上げて始まった。青春アカペラ甲子園ハモネプ出場3回のうち準優勝2回を誇る8Law。ホームカミングへの出演調整が直前までもつれ込んだが、もはやアマチュアと呼ぶのはふさわしくない8Lawの歌声は、会場の参加者を魅了した。

8Lawの次には、昨年のオンラインのホームカミングにて講演された竹内理事長がご登壇、時折在学中の思い出も振り返りながら、聴衆を惹きつけるスピーチをご披露いただいた。

理事長挨拶のあとは今回のホームカミングの進行を務めたメンバーも参加する「Forty-Two Years After (小劇場 80-85)」による軽快なバンド演

ming 2022 @D-kan



聴衆を魅了した8Lawのアカベラ

奏で再び会場が盛り上がる。トリは「MELODY UNION 87-94『ロリロリポップ』」による演奏にダンスも交えたパフォーマンスがオーディトリウムに響き渡った。

最後は廣岡敏行同窓会会長による感謝の言葉の挨拶で締めくくられ、無事に2022年のクリスマスホームカミングは幕を閉じた。今回のホームカミングは、会場受付でも寄付を募っていたD館東棟修繕募金活動の一環として開催されてもいたため、廣岡同窓会会長が挨拶でも触れたように、観客として来場した同窓生一人ひとりもこの場を作り上げる大切な一員だった。

今年のホームカミングで久しぶりにキャンパスに帰ってきた同窓生の中には、本館の西隣に竣工したばかりのトロイヤー記念アーツ・サイエンス館の存在に驚かれる方もいた。3年前のホームカミングにて議論されていたキャンパスの「未来の姿」があつという間に「今の姿」となったように、この緑あふれる素敵なキャンパスが今後も変わっていくことは想像に難くないだろう。それでもなお、このキャンパスは在学生、同窓生、教職員という「ICUファミリー」にとってのホームであることを改めて確認できた素敵なホームカミングだった。



フォイヤーでの作品展示

あなたのご意思の実現に向けて、サポートいたします。

三井住友信託銀行の遺言信託

三井住友信託銀行の遺言信託では、皆さまの財産に関するご意思を正確に反映する遺言書作成のご相談や、遺言書の保管※・遺言の執行などを一貫してお引き受けいたします。まずは財務コンサルタントまでご相談ください。

※自筆証書遺言を作成する場合、自筆証書遺言書保管制度を利用し、遺言書は法務局にて保管します。

【遺言信託(執行コース)手数料等について(消費税等込み)】(2022年11月1日現在)

〈お申込時〉基本手数料:330,000円 別途、公正証書作成費用、戸籍謄本など取り寄せに関する費用等が必要になります。※契約締結後に、解約、遺言書正本の保管辞退、遺言執行者への就任の辞退、遺言執行者の辞任等が生じた場合であっても、基本手数料はご返金いたしません。
〈遺言書保管中〉遺言書保管料:毎年6,600円 〈遺言執行時〉遺言執行報酬:当社所定の報酬を申し受けます。(最低報酬額:1,100,000円)
上記はお支払プランの一例です。他のお支払プランもあります。詳しくは、窓口までお問い合わせください。

◎国際基督教大学と当社は「遺贈による寄付制度」の提携をしています。

この制度により遺贈をされる場合は基本手数料が5万円割引となります。ご相談の際にお申し出ください。

資料のご請求は以下までお問い合わせください。 ※資料請求以外の内容については、店舗や専門部署へお取次いたします。

0120-977-641

受付時間 平日9:00~17:00(土・日・祝日および12/31~1/3はご利用いただけません)

三井住友信託 遺言信託 検索



三井住友信託銀行

お邪魔します! あのメジャー

全31の中から気になるメジャーを紹介

今回のメジャー紹介は、国際関係学を取り上げます。ICUの主たる使命と深い関わりをもつ国際関係学。ICUならではの国際関係学の学びとはどのようなものなのだろうか。今回は高松香奈 上級准教授にお話を伺いました。

文・写真：谷澤聡(本誌)



ICUだからこそ 国際関係学メジャー

国際関係学メジャーが目指すこととして、“平和に貢献できる人材を育てていくこと”が挙げられます。ICUの使命である“平和への貢献”と深く関わりますが、平和を強く意識するという視点は、ICU国際関係学メジャーの特徴だと思います。また学際性も強みの一つだと思います。例えば、国際関係を学ぶ学生が同時に経営学や生物学といった領域を学んでいる状況があります。そうした環境下では深いディ

スカッションが実現できることもあり、非常に特長的です。

また、国際関係学の教員もバックグラウンドが多様であると思います。私の専門であるジェンダー研究は、国際関係学の歴史の中では比較的新しい領域で、残念ながら国際関係学の「主流」とはされてこなかった背景があります。しかし、ICUでは講義を開講しています。他にも人権や宗教などのテーマ、そしてアフリカ、中東、東南アジアなど地域別の講義など、教員のバックグラウンドが多様であるため、授業の内容也多岐にわたっていきます。

立場の違い、見え方の違い

地域で示すと、私の研究は東南アジア(一部南アジア)での国際関係とジェンダーの課題に着目しています。国際関係学では、それぞれの国や地域が事象をどのように捉えるか、行動を起こすかなど議論しますが、例えば同じ事象でも、日本を中心に考察する場合と、東南アジアから考察する場合とは異なる捉え方ができます。ジェンダー関係も同様で、権力を持つ側と抑圧を感じる側とは、社会の見え方や経験の仕方が変わってきます。授業を通

して、さまざまな事象において「立場が違うと見え方が違う」ことを認識してもらっています。

また、学生は講義内において自分のポジションを決めなくてもいいと思っています。授業では賛否が分かれる話題を扱いますが、自分の立場を決めるよりも、いろいろな意見を出し合い、その分多面的、多角的な視点を身につけてほしいです。同じ人間から統一性のない2つの意見が出る場合もありますし、「こういう見方も、ああいう見方もできる」と自分の中での論争を持つことを、学生に体感してもらって

TAKAMATSU, Kana

国際基督教大学 上級准教授
 東京大学大学院 新領域創成科学研究科 博士(国際協力学)。専門は国際関係学(主要テーマ:ジェンダーと開発、ジェンダーと国際関係)。JICA ミャンマー事務所、東京大学社会科学研究所を経て、2011年よりICUに着任。近著に「ミャンマー・ディアスポラと政治的活動—日本における世論形成—」や「はじめてのジェンダーと開発—現場の実体験から—」(共著)などがある。



ます。

ジェンダーと国際関係学

主な研究内容として、ミャンマーの軍事政権や女性ゲリラ兵の社会復帰、そして軍事組織とジェンダーの関係について取り扱っています。女性ゲリラ兵の社会復帰について紹介すると、内戦などの武力紛争で女性たちが兵士になっている現状があります。スリランカではゲリラ組織において女性兵士が数多くおり、かつ軍の中でリーダーなど重要な役割を果たしたことも事実です。紛争後にそういった女性たちを社会の側が受け入れないこともあり、社会復帰が容易ではありません。安定的な平和の実現のために、女性兵士たちが市民としてどう社会復帰できるかという点について研究しています。

また、軍事組織において、女性の参加が何を意味するかについても取り扱っています。社会や企業でジェンダー平等が重要という考え方がありますが、軍という組織ではどうでしょうか。一つの考え方として「軍事組織における女性の登用が民主的な/ジェンダー平等な軍を作る」という意見もあります。一方で「軍事組織への女性の参加の増大はジェンダー平等のプロセスを意味しない」という意見もあります。そういった論争を承知した上で、私は「軍事組織への女性の参加がこういったインパクトをもたらすか」という研究を行っています。

JICUFを通じたミャンマーへのアプローチ

先日、JICUF(日本国際基督教大学財団)に申請したプロジェクトが承認され、助成金を頂きました。このファンドを活用して、現在のミャンマー危機について学ぶ機会を提供したいと考えています。残念ながらミャンマーに行くことが難しいので、日本国内で難民申請をしているミャンマーの方や、ミャンマー危機について取材をしているジャーナリズムの方々、ミャンマーの民主化運動、不服従活動を支えているの方々をお呼びして、真実に迫った本当の声を聴く機会をICU内で持ちたいと考えています。論文などのテキストを読むことに加えて、実際の声を聴くといういわゆる“実地の学び”を、国際関係学に興味があるICU生向けに実現したいと思っています。

今後の展望

展望として教育面と研究面の2つの側面がありますが、どちらもここ数年のコロナ禍が大きく影響しています。研究面では、ここ数年実現していなかった現地調査を実現していきたいです。現在取り組んでいる研究テーマのフィールド調査として、バングラデシュへの訪問を予定しており、現地関係者や女性兵士の方々に話を聞いていきたいと考えています。

教育面では、2023年度からは、よ

り一層対面講義も増えると思いますので、学生と交流する機会を増やしていきたいです。更には、卒業生と在学生在を結びつけるような試みも実現したいと思っています。海外で働いている卒業生とオンライン/オフラインでの交流などを通じて、実際の声を交えて国際関係学への理解を深めていきたいです。やはり交流があってこそその授業、より楽しく充実させていきたいです。

国際関係学のデータ

- 開講されている主な授業科目 (2022年度現在)
- ナショナルリズム研究
- 国際連合・国際機構論
- 国際安全保障学
- アフリカの政治と国際関係
- 東南アジアの政治と国際関係
- 国際関係史
- 外交政策分析
- アジア太平洋地域の国際関係
- 国際法
- 国際政治学
- ジェンダーと国際関係
- 日本の国際関係
- 国際政治経済学
- 地球市民社会論
- 地球環境と持続可能な開発
- 平和と人権
- 中国外交: 歴史から実践 など

翻訳・通訳 35年の経験と実績

We need your help!

「AIによる翻訳・通訳」が話題となっている中で、当社は、「人間による、心のこもった正確な翻訳・通訳」サービスを提供し続けるために、経験豊富な、AIに負けない翻訳者・通訳者を募集します。現役で活躍されている皆さまのお力をお借りできれば幸いです。

- 翻訳: IR資料、契約書、学術論文、通信文、パンフレットなど
- 通訳: 会議、セミナー、商談、会見など(「オンライン通訳」に対応可能な方)

▶ 英語、仏語、西語、露語、ウクライナ語、中国語、韓国語、その他アジア言語
※翻訳・通訳のお仕事のご相談・ご依頼も歓迎します。

翻訳者・通訳者
募集!

翻訳・通訳・制作(デザイン・印刷) **TEL 03-3431-2118**

(株)エクシム・インターナショナル URL: <http://www.exim-int.com/>

EXIM INTERNATIONAL, INC.

担当: 三枝 雅恵 (E-mail: saegusa@exim-int.com)

President 永島 克彦 (14期)

Advisor 比奈地 康晴 (14期)

(2022年4月)

東京事務所 〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 セネラルビル3F
 TEL 03-3431-2118 FAX 03-3431-2120
 E-mail: tokyo@exim-int.com

横浜事務所 〒232-0063 横浜南区中里2-14-5
 TEL 045-721-4800 FAX 045-721-5165
 E-mail: yokohama@exim-int.com

松本中央法律事務所

Matsumoto Central Law Office

弁護士 松本 典子
 (ID01・45期・理学科生物学専攻卒業)
 懇切丁寧に対応いたします。
 お気軽にお問い合わせください。

全国からZOOM・電話相談対応

TEL **03-5776-2435**

WEB <https://www.m-laws.jp>

東京都中央区日本橋小網町8-2
 E-mail: n.matsu@m-law.jp

取扱分野: 企業法務一般・契約締結交渉・離婚・男女問題・遺言
 相続・環境問題・労働問題・債務整理・刑事弁護など



今回紹介する資料 / Referred Materials

新入生リトリートの様子 / Scenes from the New Student Retreat

From the University 大学のページ

当ページは、ICUアーカイブズが連載を担当しています。

皆さまが在学されていた当時の事柄やこれまで知らなかったICUについて知る機会にもなるかと存じますので、ぜひご一読ください。

文：松山龍彦 (ICUアーカイブズ)

TO: All Students

終わらない「明日の大学」

2022年10月28日から29日、八ヶ岳山麓のホテルで行われた新入生リトリートに参加する機会を得ました。持込企画の講師を依頼されたことです。3年ぶりに遠隔地で行われたリトリートでした。今回は“Live and Let Live”のテーマのもと平和について話し合うという趣旨で行われました。竹内理事長の基調講演はICUとの関わり、ICUの始まりについての話。続くパネルディスカッションでは平和について、学生を含むパネラーたちのなかなか熱の入ったやり取りも見られ、「ICUらしさ」の健在を確認できました。

新入生リトリートをはじめ、ICUの学生は入学式・コンボケーションほかのイベントや授業、プログラム、教員との会話の中など様々な場面でICUの意義とあり方について聞き、話し合う機会が多かったと思います。ICUは何を理想としているか。またその実現のために何が求められているのか。今回はICUアーカイブズが所蔵する資料の中から、大学が学生に向けて放ったメッセージをいくつか見ていくことで、それらを確かめてみたいと思います。まず、開学1年前の1952年に作成された小冊子『ICU展望』から湯浅八郎総長の言葉を抜粋してみましょう。

「明日の大学ICU」

ICUは明日の大学である。明日の世界と明日の世界に生きる人間とを対象とする大学である。ICUの独自性を端的に表現すれば斯くいえよう。もとより文化の伝統を無視し歴史の現実を忘却しては教育は成り立たぬ。同時に伝統を(ママ)固執し現実に即応するだけでは真の教育の実は挙げられない。これICUが歴史に即応しつゝ歴史を超越せんとする理由である。(『ICU展望』より)

「歴史を超越する」大学。1952年に書かれたこの文章からは、先の戦争への反省とグローバルな平和秩序の構築という高邁な目標を実現するためのまばゆいばかりの決意が感じられます。これはひとりICUだけではなく、戦後日本で立ち上がった各種の社会運動に見られる未来に向かって奮進する並々ならぬエネルギーと希望に満ちた物言いです。これを読んだ学生たちは、自分たちに期待された役割に身の引き締まる思いがしたことでしょ。

IとCとUと

ここからは、I(国際性)、C(キリスト教主義)、U(学問への使命)の順に関連文章を引用します。まず、ICUの考える国際性を説く星野命先生の言葉です。

私がICUに入学された皆さんに願うことの一つは、ICUでの学習を一つの新しい第3の文化へと参入する「文化化」(enculturation)として考え、それに励んでほしいということです。日本だけにしか通用しないやり方でもなく、どこかの国のやり方にかぶれてしまうのでもない、国際社会で通用するやり方です。それは単に英語が話せるとか、社交的になるとか、国際情勢に明るいかということではありません。自立した一人の人間として、相手がどこの国の人であっても、その人の意志・立場・願いが自分のそれと違っていても、十分理解しようとする態度・やり方を身につけることです。それはみなさんが国際的な舞台上、自国本位主義・自民族中心主義で振る舞ったりしないための基礎訓練です。(『異文化との出会い、かかわり、その結果』[1989年度ICU入学記念講演]より)

諍いの根本には自分と自分が属する共同体を至上のものとして他を無視・排除・攻撃する人間の業があります。ICUの国際性はそれを断ち切るための訓練という位置づけという考えですね。次は大学の掲げるキリスト教主義について、学生ハンドブックの〈キリスト教への使命〉から以下の文章です。

学問を通じて得られる知識は、それ自体が最終目的ではなく、例えば社会改善の責任というようにさらに深い意義をともなうものです。この意味において、知識、信仰、行為は本質的に一体であるべきです。ICUはキリスト教信徒を作ることを目的としてはいませんが、学生一人一人が学生生活を通じて個々の人生や社会生活の中における神の存在とその力に目を開くよう呼びかけられています。この呼びかけは、学生が自ら真理を求め、それぞれが見出した真理に身をささげることがを願う、大学から学生への挑戦です。

学生に挑戦してくる大学って何でしょうか？ 他に聞いたことがありません。すごいですね。次は新入生オリエンテーション配布冊子『大学の理念とICUの教育1964』から、ICUの重視する一般教育について、篠遠喜人教養学部長の言葉です。

日本の大学では、じっさいには一般教育はうまくおこなわれてこなかったようである。滝川幸辰先生はこういっておられる。「一般教育がうまくいかないが、新制(教育)の死命を制するものですが、不幸にして、わたくしは、それが成功しているという話を、聞いたことがありません。」その理由として、教科書がない、設備が足りない、先生がいないなどをあげておられる。わたしはこれに加えたい。「それは一般教育についての理解なり勉強なりが足りないのだ」と。一般教育が新制大学にとりいれられたのは、過去の大学教育の反省によるものである。国家主義的指導者階級・官僚の育成を掲げた教育がもたらしたのは国家の近代化と最後の破局であった。この歴史的にいたましい経験から生まれたのが大学の一般教育であった。一般教育は特定の専門的知識あるいは技術的訓練をあたえることではなく思考の方法を習得せしめると同時に学問の成果を理解する能力を育成し、社会人として活躍する際に必要な一般的教養を付与することである。それは専門教育の従ではなく準備教育でもない。関連はあるが、別個にあるべきものである。ICUは教養学部であるから、その実践の場でありたい。(『大学の理念とICUの教育——新入生のために』[1964]より)

ICU教学のコアとなっている一般教育のとらえ方について述べています。かつて国立大学を中心に設けられた1、2年次の教養部(教養学部ではない)は終戦後の教育改革で誕生したりベラルアーツ実践の場になるはずの制度でしたが、実際には各分野の一般的な基礎知識の伝達の域を出ないまま30年近く続きました。これは明らかな失敗だったのです。現在では多くの大学でリベラルアーツが導入されるようになりましたが、それを全学的基礎として成り立っている大学は日本にはほとんどありません。

ICUの神髄とは

最後は、ICUのユニークさについて横田洋三元教授の言葉から抜粋したものです。

ICUのユニークさとは何か？ 少人数制・一般教育重視・女子の割合が高い・国際性・英語教育・広く自然豊かなキャンパス・寮教員住宅のキャンパスコミュニティなどなど。しかしこれらの特徴はICUの外をただ写真に撮っただけのもの、つまり外面です。だから我々はこれがICUです、ねといわれると、もっとその奥底に何かあ

るんだというふうには言いたくなる。考えてみるとこれらの特徴は常に正の評価を受けるとは限りません。英語はわざわざ高等教育の場で習うようなものなのか、専門分野に特化した教育こそ大学の本分なのではないか、森林公園のような環境で社会問題を問う厳しい学問ができるのかなどなど。私はこう思います。ICUのユニークさとは、戦後の混乱した日本の教育状況においてこれらの特徴を「誤解や偏見を恐れずに打ち出して」存在していること。英語教育が特色なのではなくて、日本の現在の教育状況の中でなぜ英語教育をしなければならないのかその必要性をよく考えてそれをひとつのICUのやり方として打ち出している。明治以来の日本の教育は形式的には成功した。しかし国家のための教育は敗戦で挫折した。そして民主主義を標榜する戦後日本の教育もまた問題だらけです。制度面だけにとらわれた改革のせいで、確固たる方針を持たず皆が思い思いに自由に教育をすればいいという間違った自由放任主義が広まった結果、教育というものが受験戦争を勝ち抜いて地位と金と名誉を得るための道具になっている。ICUは「神と人々に奉仕する国際的な人材を育成する」という教育理念のもとにプログラムや施設を充実させてきた。ICUは施設でも建物でもキャンパスでもない。理想と誠実さと実行力を持った学生と先生の集団、その集団の中での知的交流。大学の基本は人間であって物ではない。ICUはそのことを最初から意識し、そしてそれを実行してきた大学だと思っています。(『ICUのユニークさについて』[昭和52年度国際基督教大学入学記念講演]より)

まず大学の理念と目的があって、その実現のために必要な施設やプログラムほかが付伴するのであって、形だけ真似てもだめだということですね。何のためにこの大学が作られたのか、建学の精神をぶれずに掲げ続けてきたことがICUの価値と言えそうです。アーカイブズの資料からは、開学以来じつにさまざまな場において「ICUとは何か？」が問われ、話し合われてきたことが分かります。それは言い換えればリベラルアーツとは何か、大学はいかにして世界に貢献するか、人間とは何でどうあるべきかを問うものなのでしょう。その問いこそがICUであり、その問いを失った時、ICUもまた消えるべき存在なのだろうと思います。



TO: All Students

ICU Archives provides a series of articles for this section from the last issue. We hope these stories will give you an opportunity to learn about the history of ICU, looking back on those times when you studied here and discovering facts which you were not aware of till now.

Text by Tatsuhiko Matsuyama (ICU Archives)

The Enduring University of Tomorrow

I had an opportunity to participate in the New Student Retreat, which was held at a hotel in the foothills of the Yatsugatake Mountains between October 28-29, 2022. This was the first time in three years that the retreat was held in person, off-campus. Under the theme of “Live and Let Live,” the objective of the retreat was to discuss peace, and I was invited to lead one of the special programs devised by faculty. In his keynote speech, Dr. Hirotake Takeuchi, Chair of the ICU Board of Trustees, spoke of the beginnings of ICU and his relationship with the university. In the panel discussion that followed, the panelists, including a student representative, engaged in a passionate dialogue on peace. The retreat reaffirmed the traditional uniqueness of ICU.

During the course of their studies, ICU students have many opportunities—retreats, convocations, university events, lectures, programs, and conversations with faculty—to learn about and discuss the ICU’s purpose and the way of being. We are constantly asking ourselves what ICU’s ideals are and what we must do to achieve them. I looked through the university’s archives for messages from the university to the students in search of answers to these key questions. First is an excerpt from Dr. Hachiro Yuasa’s message in the *1952 ICU Prospects*, published one year before the university’s founding. Dr. Yuasa was the first president of ICU.

ICU, the University of Tomorrow

ICU is the university of tomorrow. It is a place of learning designed for tomorrow’s world and its people. This is how I would describe ICU’s uniqueness. Education will not succeed if you ignore cultural traditions and forget the realities of history. At the same time, education will not bear fruit if we insist on adhering to tradition and only respond to what is in front of us. This is why ICU attempts to transcend history while responding to it. From *ICU Prospects*

A university that transcends history. From this message written in 1952, we can feel Dr. Yuasa’s regret over the events of the Second World War and his strong determination to achieve world peace and order, a lofty goal for the times. His message is a call to action filled with extraordinary energy and hope that could be heard not only within ICU but from the numerous post-war social movements seeking a better future. The students who read this message must have felt the weight of the responsibility placed on them to shape the future.

The I, the C, and the U

The following excerpts touch on the meaning behind and in this order of each alphabet of ICU: I (Internationalism), C (Christianity), and U (University’s academic mission). First is an excerpt of the late Professor Akira Hoshino’s explanation of internationalism.

One of my requests to the new students joining ICU is to see your learning at the university as enculturation, an entry to an unknown third culture, and do your best in this endeavor. You need to find a way to thrive in the international world, which means you cannot stick to what works only in Japan or imitate what other countries are doing. Internationalism means more than simply being proficient in English, becoming an extrovert, or being knowledgeable on world affairs. It means becoming an independent person with the mindset and the ability to understand and empathize with people of any nationality, even though their beliefs, positions, and wishes may differ from yours. Your time at ICU is fundamental training to ensure you do not adopt a nationalistic or ethnocentric stance on an international stage.

From *What I learned from my encounter and relationship with another culture* (Memorial lecture at the 1989 matriculation ceremony)

At the root of any conflict is the tendency of humans to assume that they and their community are superior and ignore, exclude, or attack those outside their community. Professor Hoshino saw ICU’s internationalism as training to end such discrimination and prevent conflicts. Next is an excerpt from *Our Christian Commitment* in the student handbook explaining Christianity in the context of ICU.

In education, the knowledge we acquire is not the ultimate goal. There is a greater purpose, such as using that knowledge to improve society. From this perspective, knowledge, faith, and action should be unified by its nature. ICU does not seek to convert its students to Christianity, but we call on them to open their eyes to God and his power in their daily lives as students and as members of society. To seek the truth and commit to that belief. This is the challenge the university asks of its students.

What kind of university challenges its students? I do not know of any other university that does that. It is fascinating. The following is an excerpt from an article on general education, which ICU places great importance on, published in the new student orientation booklet *1964 University Philosophy and ICU Education*. It was written by the late Professor Yoshito Shinoto when he was the

Dean of the College of Liberal Arts.

It seems that Japanese universities have not done a very good job of teaching general education. The late Dr. Yuki-toki Takikawa once said that the new education system is determined by the success or the failure of general education, and that he had yet to hear a success story. He said that the lack of textbooks, facilities, and teachers contributed to this failure. I would like to add to these reasons that people had not fully studied and lacked understanding the concept of general education.

General education was introduced into post-war Japanese universities to make improvements to the past system. The education that had aimed to foster a hierarchy of nationalistic leaders and bureaucrats led to Japan’s modernization and its eventual catastrophe. General education came about from this painful experience of the past.

General education is not about providing specialized knowledge or technical training: it is about teaching students how to think, developing the ability to understand what education can accomplish, and equipping them with the necessary general knowledge to thrive as working members of society. It is neither a subsidiary nor a prerequisite to a specialized education. They are related, but general education must exist as its own. ICU is a liberal arts college and should be a place that offers general education for the purpose mentioned earlier.

From *University Philosophy and ICU Education – For new students* (1964)

The above excerpt talks about the approach to general education, which is the core of ICU education. As part of the post-war education reform, the Kyoyobu (general education courses) was established mainly in public universities to offer general education to first and second-year students. However, unlike proper liberal arts colleges, the department ended up with only giving students the fundamental knowledge of each specialized field, which went on for nearly 30 years. It was an apparent failure of the system. Today, many universities offer liberal arts courses, but very few offer them as a holistic foundational program.

The Essence of ICU

Lastly, the following is an excerpt of the late Professor Yozo Yokota’s thoughts on the uniqueness of ICU.

What makes ICU unique? Is it the small-size classes, emphasis on general education, high female-student ratio, internationalism, English education, large green campus, or on-campus staff residence and its community? But these are what one sees from the outside. They are what a camera would capture if we

took a photo of ICU. When people describe ICU this way, I would like to tell them that there is something more at the depth than what you see. And when you think about it, these characteristics may not always be seen positively. Is English something one needs to go out of their way to learn in higher education? Isn’t a university a place mainly for specialized learning? Can students engage in a rigorous study of social issues in a place resembling a forest park? For me, ICU’s uniqueness lies in the displaying of these characteristics without the fear of being misunderstood or receiving prejudice in Japan’s turbulent post-war education setting. Not that English education is the characteristic of ICU, but we have thought hard and determined that English must be taught in the present-day Japan and so have made it one of the pillars of our curriculum.

Education in Japan since the Meiji period has been a formal success, but education for the sake of the nation collapsed with Japan’s defeat in the Second World War. And the post-war education system, which championed democracy, is also beset by problems. The education reform focused only on an institutional aspect. Advocating wrong laissez-faire, the system left the educators to teach as they saw fit without any guidance. This approach let education fell into a tool to achieve status, money, and honor by winning the university entrance exam war. On the other hand, ICU has been enriching its programs and facilities to fulfill its educational mission of fostering people with an international mindset who will serve God and the people. ICU is not a facility, a building, or a campus. It is a community of students and teachers with ideals, integrity, and enthusiasm. It is an intellectual exchange for this community. I believe ICU has embraced and executed this idea from the beginning.

From *ICU and Its Uniqueness* (From Memorial lecture at the 1977 ICU matriculation ceremony)

A university is defined by its philosophy and purpose and not by its facilities or programs, which are simply tools for achieving its vision. ICU has never forgotten its founding spirit; the mission that has been upheld to date. That is the value of ICU. We can see from the archives that the university has engaged in discussions on “What is ICU?” in countless occasions since its foundation. “What is liberal arts?” “How does a university contribute to the world?” and “What does it mean to be human?” We must keep asking ourselves these questions as it is our *raison d’être*. When these questions cease to be asked, ICU may also cease to exist.



photo Tetsu Oma

From the Alumni House

アラムナイハウスから

第7回ICUICUの会総会のご報告

文：支部長 田中博子 (30 ID86)

ICUICUの会では、9月18日(日)に約25人の会員の参加を得て第7回総会を行い、昨年の活動報告(主として「コーヒー&ワインアワー」の実施。毎回異なる会員が登壇し、最近の活動に関して話をして気軽に意見交換を行うオンラインイベント)、会計報告を行いました。当初アラムナイハウスでの対面の会と、世界各地の会員の参加を可能にするためのオンライン会の2部制を企画しておりましたが、台風の影響で急遽オンライン会のみの開催となりました。

また、当支部は、会の発足から7年がたち、会員数も200人を超えました。また、今年2月より事務局メンバーが一部改選され、新たな事務局で活動を行っております。当支部は、多様な世代・地理的にも業種的にも幅広い活動拠点(国際機関、大学、コンサルティング企業、NPO等)で活躍している会員の豊かなリソースに恵まれています。そこで、今年の総会では、ブレイクアウト・セッションを行って、今後の支部の活動に向けた会員の期待などを話し合い、新たな活動へのアイデアを生み出すことを試みました。大変に活発かつクリエイティブな意見が出され、支部では早速総会で出されたアイデアのフォローアップ活動として、支部のFacebook上での「自己紹介リレー」をスタート。会員同士が知り合える機会づくりを行っています。

ICUICUの会では卒業したばかりの若い方々を含め、国際協力に関心のある方々の会員を募集しています。どうぞicuicu.secretariat@gmail.comまでお気軽にメールしてください。



大塚桃奈さんDAY賞受賞 お祝いの会報告

文：香川支部支部長 浜崎直哉 (37 ID93)

2022年9月25日(日) 17時～18時30分、2022年のDAY賞を受賞された大塚

桃奈さん(64 ID20)のお祝いの会をオンラインにて、大塚さんが仕事をされている上勝町ゼロ・ウェストセンターと、徳島・香川等の参加者を繋いで、開催いたしました。

参加者は、徳島支部は木村静香支部長(29 ID85)他4人、香川支部は浜崎直哉(37 ID93)他7人、そして元同窓会会長の木越純さん(27 ID83)にもご参加いただきました。

徳島支部木村支部長から開催の挨拶をいただき、香川支部浜崎から、会の趣旨と大塚桃奈さんの紹介をいたしました。続いて大塚さんから、ゼロ・ウェストセンターの中をバーチャルツアーを行いながら、仕事の状況をご説明いただきました。そして参加された全員の皆さまから、自己紹介や近況報告、大塚さんへの質問などがあり、会は和やかに終了しました。

徳島支部は久しぶりの会合で、香川支部も小さな会合はありますが、この人数で会を行うことは最近なく、数人の方は香川県外から久しぶりの参加となり、オンラインならではの良い設えができたようにも思います。

ゼロ・ウェストセンターを訪れていない方にも、バーチャルツアーで詳しく館内を案内できて、ぜひ実際に行ってみてほしいという感想が出ていました。

また、大塚さんの仕事そのものにも、皆さん強く興味を持たれていて、それぞれの方の携わられている立場から環境問題の在り方を語られていたのも印象的でした。

今後も、徳島支部と香川支部は隣県の繋がりを活かして、交流の機会を続けていきたいと考えています。



タイ支部会報告

文：三野琢磨 (42 ID98)

コロナ禍により、2020年1月を最後に開催できなかったタイ支部会でしたが、10月から非常事態宣言が解除されたこと

もあり、10月2日、ピザがおいしいと評判のPIZZA MASSILIAで同窓会を開催いたしました。

上はID94から下はID19まで、親子程の年齢差のある7人が集まり、ICUでの楽しい思い出を語り合いました。皆さんタイでのビジネスや学業で活躍しているパワフルな方ばかりで、先輩にも後輩にも刺激満載の同窓会でした。

開催は不定期ですが、いつでもメンバーを募集中です。ICUに縁のある方で、タイに在住の方は、下記メールまで、ご連絡をお待ちしています。

連絡先：thailand-chapter@icualumni.com



基督教伝道献身者の会

第4回懇談会報告

文：有馬平吉(18) 梅津裕美(27 ID83)

今年も対面とオンラインを併用して2022年11月3日に基督教伝道献身者の会第4回懇談会を無事行うことができました。当日来られた方々、来られなかった方々も含め、約三十数人の方々が参加されました。

会場はシーベリーチャペル、総合司会は有馬平吉さん(18)、プログラムは、次の通りです。

1. 讃美歌215番「あしたのひかり」
左近和子さん(8) 伴奏
2. 開会の祈り
北原葉子さん(33 ID89)
3. ショートスピーチ
①小野慈美さん(20 ID76)
②三河悠希子さん(50 ID06)
4. 写真撮影 ZOOM操作
富岡徹郎さん(26 ID82)
5. 参加者紹介
6. レクレーション「ICUクイズ」
梅津裕美さん(27 ID83)
7. 参加者一言メッセージ
8. 諸報告「証言集」「学生との対話集会」「募金」

梅津裕美さん(27 ID83)

9. ICUソングをアカペラで歌う

10. 閉会の祈り

伊藤英志さん(33 ID89)

お天気にも恵まれ素晴らしい会が無事終了いたしました。



N館ホームカミングを開催、 幅広い卒業期から参加

文：新村敏雄(本誌)

N館は、新館(トロイヤー記念アーツ・サイエンス館)竣工に伴い、2023年3月をもって理学館としての使命を終了します。建物としては教室棟等として残るものの、大幅な改修が予定され、実験施設なども移設となるため、その前に、N館で学んできた理系専攻の同窓生、元教職員、関係者を対象に、11月26日にオープンハウスが開催されました。

当日は気温も低くあいにくの天気でしたが、家族連れも含めて多くの参加者が詰めかけました。

13時半から懐かしのN-220教室に集った同窓生はおよそ200人以上。ご家族なども含めて300人ほどとなりました。久保謙哉自然科学部門長との挨拶に始まり、富岡徹郎常務理事によるN館の歴史のプレゼンなどが披露されました。勝見允行、風間晴子、吉野輝雄、北原和夫各名誉教授のほか、懐かしい先生方も参加し、思い出話が尽きませんでした。

そのあと富岡理事の案内で、工事の外壁が撤去されて外観が見えるようになったアーツ・サイエンス館やD館などをめぐるミニキャンパスツアーも行われました。

※ 当日の発表資料はこちら：

<https://office.icu.ac.jp/departments/science/NS/nsreunion.html>



photo Tetsu Oma

寄付者御芳名 Donors

齋藤顯一(17)
富岡徹郎(26 ID82)
貴重なご寄付を賜り、誠にありがとうございます。

たずね人 Missing

池田英人(35 ID91)
深見淳(43 ID99)
田中智己(49 ID05)
小山英恵(55 ID11)
市村脩一郎(57 ID13)
野邊大樹(61 ID17)
鳴島歳紀(63 ID19)
動静をご存知の方は事務局までご一報ください。

訃報 Obituary

庄司太郎ICU名誉教授
長谷川潮ICU元職員
茅野徹郎(1)
袋美光(1)
村井担郎(1)
関格子(1)
西山安彦(2)
新保香代子(2)
小川洋司(3)
小川浩一(5)
砂子隆央(6)
小山修三(7)
青木久子(9)
庄司忠史(9)
富所美紀子(18)
菊池祐介(26 ID82)
勝畑重明(30 ID86)
浅野泰子(34 ID90)
林朋子(36 ID92)
寺地祐介(47 ID03)
心よりお悔やみ申し上げます。

事務局からのお知らせ

★ 広告募集!

本誌では広告を募集しています。フルサイズ6万円、ハーフサイズ3万円で承っております。ご興味のある方は、詳細を事務局までお問合せください。

★ 原稿をお寄せください!

期会、リユニオンなどの案内・報告をお寄せください。本誌およびWebサイトに掲載いたします。

★ 住所変更について

住所・勤務先・氏名の変更の際はメールまたは同窓会のWebサイトの住所変更から、ご一報ください。

https://www.icualumni.com/to_alumni/register/

地方・海外にご転勤の際には支部をご紹介いたします。同窓会事務局までお問合せください。携帯の方はこちらからどうぞ:



★ ご協力をお願いします

大学の宣伝=大学への支援という考え方から、同窓生の著作、雑誌インタビューなどには、略歴欄に「国際基督教大学卒業」とお入れいただけますよう、お願い申し上げます。

メールアドレス登録・更新キャンペーン実施中

ICU同窓会では、2023年1月から会員向けメールマガジンによる情報発信を始めました。

同窓会にメールアドレスが登録されていない(と思われる)、使っていない古いアドレスが登録されている(気がする) みなさん、この機会にあらためて最新のメールアドレスをお知らせください。

同窓会の会員データベースに登録し、同窓会からのお知らせやメルマガなどをお届けいたします!

登録はこちらのフォームからお願いします。

<https://forms.gle/6Ex5C9uGU3CFCeDX9>



アラムナイニュースWeb版配信のお申込について

アラムナイニュースWEB版の配信をご希望の方は、下記フォームへご連絡ください。

郵送でのお届けからメール配信に切り替えさせていただきます。

お手続きはこちらのフォームからお願いします。

<https://forms.gle/gUZ3YzXb3QpGpPMt6>



—— DAY賞候補者をご推薦ください ——

Distinguished Alumni of the Year (DAY) 賞は、国際基督教大学に在籍したことのある方(卒業生・留学生・教職員。ただし故人は対象外)の中から、大学および同窓会の知名度・魅力度を高めることに貢献した方に対し、その功績を称えるために贈呈されます。皆様からのご推薦をお待ち申し上げております。

- ※ 自薦・他薦を問いません。
- ※ 推薦は年間を通して受け付け、毎年10月15日受け付け分までを選考対象として翌3月の桜祭りで受賞者を表彰します。
- ※ 受賞者は同窓会ウェブサイトおよびアラムナイニュースで発表されます。
- ※ 推薦および選考の過程については公開されません。
- ※ 歴代の受賞者は、ウェブサイトをご覧ください。

推薦方法 いずれかの方法でご推薦ください

- 同窓会ウェブサイト「DAY賞」のページ[推薦フォーム]をご利用ください。
<https://www.icualumni.com/activities/day/>
- 同ページより[推薦用紙PDF]をダウンロードし、必要事項をご記入の上同窓会事務局あてに郵送またはFAXでお送りください。
- メールに以下の必要事項を記載して同窓会事務局あてにお送りください。
 - 推薦したい方の氏名
 - 推薦したい方の卒業年あるいは在籍年(分かる範囲で)
 - 推薦理由: 新聞記事などの客観的資料があればあわせてお送りください。
 - あなた(推薦者)の氏名、卒業年または学生ID、住所、電話番号、メールアドレス



3月26日
on Sunday

2023年3月26日開催 桜祭りのお知らせ

文：桜祭り実行委員長 吉澤洋 (33 ID89)

春の訪れとともに、同窓会「桜祭り」を開催します。18回目を迎える同窓会「桜祭り」は、同窓会年次総会、DAY賞（※）表彰式、卒業50周年記念式典など、年に一度の同窓会総合イベントです。

コロナ禍でここ3年、皆様が集う会を企画できなかったことを残念に思っていました。

しかしここへ来てやっと通常のコミュニケーションに戻りつつあり、対面の会を催す運びとなりました。

同窓会幹事一同その喜びを皆様と分かち合うことを楽しみにしておりますので、是非ともご参集くださいますようお願い申し上げます。

（※）DAY賞 (Distinguished Alumni of the Year Award) は、ICUに在籍したことのある方(卒業生・留学生・旧教職員を含む)の中から、大学および同窓会の知名度・魅力を高めることに貢献した方に対し、その功績を称えるため毎年授与されるもので、今年は4人の卒業生に授与されることになりました。

DAY賞 (Distinguished Alumni of the Year Award) 2023受賞者決定!



青木理恵子

AOKI, Rieko (22 ID78/G1981)

ソーシャルワーカー。特定非営利活動法人CHARM (Center for Health and Rights of Migrants) 事務局長。ICU卒業後、日本YWCAにて活動。その後フィリピンの大学でソーシャルワークの実践を学ぶ。帰国後一貫して在日外国人支援の活動に従事。多言語電話相談コーディネーター、就労支援のための京都バザールカフェの立ち上げなどに携わり、2002年からCHARM事務局長として在日外国人の健康や人権を守るプログラムを次々と実行に移す。「システム化できない小さな規模の支援」を知恵と対話、自ら動くことで日々積み重ねている。2022年9月に「在日外国人と医療～誰一人取り残さないために～」というテーマで開催された日本キリスト者医科連盟第73回総会では女性初の総会会長を務めた。

Social worker. Specified non-profit organization CHARM (Center for Health and Rights of Migrants) Secretary General.

After graduating from ICU, she worked at the Japan YWCA. Then she studied social work practice at a university in the Philippines. After returning to Japan, she consistently engaged in activities to support foreign residents in Japan. She has been involved in launching multilingual telephone consultation coordinator and the establishment of the Kyoto Bazaar Café for employment support, since 2002 as the secretary general of CHARM, she has implemented programs to protect the health and human rights of foreign residents in Japan.

Through her wisdom, dialogue, and moving by herself, she builds up daily "Support on a small scale that cannot be systematized". In September 2022, she served as the first female president of the 73rd General Assembly of the Japan Christian Medical Association, which was held under the theme of "Foreigners in Japan and Medical Care – To Leave No One Behind –."



横関祐見子

YOKOZEKI, Yumiko (24 ID80)

JICA広域企画調査員(サヘル地域平和構築・在セネガル)。ICUで教育学と心理学を専攻後、ハーバード大学教育学修士、ロンドン大学教育研究所にてPh.D. (博士) を取得。ジンバブエのNGO団体やユニセフ事務所などで教育・幼児教育に携わり、JICAに転じたのちは、国際協力専門員として、アフリカ地域を中心に教育開発に従事。その後ユニセフに復職し、東南部と中西部アフリカ地域事務所をカバー、2015年4月よりユネスコに移りアフリカ地域能力開発国際研究所所長。2022年11月から現職。2020年には、長年にわたるアフリカ教育界への貢献と、日本とアフリカの架け橋としての功績により、外務大臣表彰を受賞した。

JICA's Senior Adviser for peacebuilding in the Sahel Region in Senegal. After majoring in education and psychology at ICU, she earned a master's degree in education from Harvard University and a Ph.D. from the UCL Institute of Education. As a career start, she worked on education and early childhood education at an NGO and UNICEF office in Zimbabwe. After switching to JICA, she engaged in educational development mainly in the African region as an international cooperation specialist. After that, she returned to UNICEF, overseeing the South East and Central and West Africa Regional Offices. In 2015, She was appointed as Director of the UNESCO IICBA (International Institute for Capacity Building in Africa). In 2020, she received the Foreign Minister's Commendation for her many years of contribution to the African educational community and her achievements as a bridge between Japan and Africa.



林理恵

HAYASHI, Rie (29 ID85)

日本放送協会(NHK)専務理事・メディア総局長。ICUではコミュニケーションを学び、1986年NHK入局。仙台放送局や報道局政治部などで記者として従事した後、国際協力の仕事を担う。神戸放送局長や国際放送局長などを歴任。2020年からは理事として、人事制度改革やD&Iを推進した。2022年にメディア総局長に就任。NHKの報道、番組制作デジタル発信、イベント等メディア全般を統括する役員に女性が就くのは初めてであり、幅広い経験から、NHKの放送・サービスの現場に多様性をもたらす変革の担い手として活躍している。幼いころはバリに住み、高校から大学にかけて米国留学した経験から、現在も国際交流に関心が高い。舞台鑑賞が趣味で特に人形浄瑠璃文楽には造詣が深い。

Executive Board member and Executive Director of Media of Nippon Hoso Kyokai (NHK, known in English as Japan Broadcasting Corporation). During her time at ICU, she studied communication and joined NHK in 1986 after graduating from ICU. She worked as a reporter in Sendai Broadcasting Station and Political News Division before taking on a career in international relations. She later served as Head of Kobe Broadcasting Station then Head of NHK WORLD. Since 2020 she has been a board member of NHK and led the effort to reform the human resource management as well as to promote D&I. In 2022, she was appointed Executive Director of Media, responsible for NHK's all media operations, including news and program production, digital services, and events. Being the first woman to hold this position in NHK's history, she has been a leader in promoting diversity and a driving force in the transformation of NHK.

Having lived in Paris as a child and studying in the U.S. in high school and college, she remains highly interested in international exchange. She enjoys watching stage performances and is highly knowledgeable about Ningyo Joruri Bunraku, Japanese traditional puppet theater.



折居徳正

ORII, Norimasa (35 ID91)

パスウェイズ・ジャパン代表理事。ICUでは人文科学科にて宗教や哲学を中心に学び1991年卒業。

企業勤務を経て2002年よりNGO職員としてアフガニスタンに駐在する他、イラン、パレスチナ、シリア、ミャンマー等での人道支援に従事。2016年より難民支援協会にて難民受け入れ事業マネージャーを務め、シリアの若者を、ICUを始め日本各地の大学・日本語学校に留学生として受け入れ。2021年難民支援協会より同事業の移管を受けてパスウェイズ・ジャパンの設立に携わり、2022年にはJICUFと「日本・ウクライナ教育パスウェイズ」の名のもとに、ウクライナ学生を日本の大学・日本語学校に受け入れる活動を中心として行う。

Representative director of Pathways Japan. Graduated from ICU in 1991, majoring in religion and philosophy in the humanities department. After working for a company, he has been stationed in Afghanistan as an NGO employee since 2002 and has also worked in humanitarian assistance in Iran, Palestine, Syria, Myanmar, etc. Since 2016, he has been a Project Manager for Refugee Admission at Japan Association for Refugees, he has supported the admission of Syrian youths as international students at ICU and other universities and language schools in Japan. In 2021, he was involved in the establishment of Pathways Japan after receiving the transfer of the project from Japan Association for Refugees. In 2022, together with JICUF, under the name of "Japan-Ukraine Education Pathways" he mainly carries out activities to admit Ukrainian students to Japanese universities and language schools.

開催日：2023年3月26日(日)13:30～16:30

プログラム：13:30～ 同窓会総会、卒業50周年記念式典、DAY 賞表彰式 於大学礼拝堂
15:30～ 懇親会 於大学食堂

参加申込：以下の申し込みフォームからお申し込みください。
<https://forms.gle/5EvecMU9WnqkuHnGA>
QRコードはこちら →



※卒業50周年の17期生の皆様は別途お送りのご案内状からご連絡ください。
お願い：出席、欠席にかかわらず、出欠のご連絡をお願い申し上げます。

申込締切：3月10日(金)

お問合せ：同窓会事務局：aaoffice@icualumni.com

※社会情勢の変化などにより、プログラムに変更が生じる可能性があります。

詳細につきましては、同窓会Webサイト
<https://www.icualumni.com/>をご参照ください。

QRコードはこちら →



STAFF

EDITOR IN CHIEF

新村敏雄 SHINMURA, Toshio (27 ID83)

MANAGING EDITOR

松田真理子 MATSUDA, Mariko (38 ID94)

EDITORS

長谷川由紀 HASEGAWA, Yuki (32 ID88)

太田順子 OOTA, Junko (35 ID91)

安楽由紀子 ANRAKU, Yukiko (40 ID96)

星川菜穂子 HOSHIKAWA, Naoko (40 ID96)

谷澤 聡 TANIZAWA, Satoshi (54 ID10)

川島美菜 KAWASHIMA, Mina (58 ID14)

滝沢貴大 TAKIZAWA, Takahiro (62 ID18)

PHOTOGRAPHER

大間哲 OMA, Tetsu (34 ID90)

ART DIRECTOR

佐野久美子 SANO, Kumiko (44 ID00)

PRINTING DIRECTOR

坂井 健 SAKAI, Takeshi (小宮山印刷)

EXECUTIVE DIRECTOR

池島広子 IKESHIMA, Hiroko (27 ID83)

PUBLISHER

廣岡敏行 HIROOKA, Toshiyuki (31 ID87)

cover photo: MATSUSHIMA, Mari (36 ID92)

ご意見・ご感想をお気軽に

アラムナイニュースは、同窓生のみ
なさまのために制作しているものです。
今後の制作の参考にしますので、ご意
見・ご感想、企画や人物の紹介等有
る方は、メールにてお気軽に同窓会事
務局までお知らせください。

アラムナイニュース編集部員募集

あなたの経験をANに生かしてみま
せんか？ 企画、取材、執筆、撮影、
編集進行等と一緒にやって頂ける方を
大募集中です。もちろん未経験でも可。
最初は一緒に取材などを行いながら編
集のプロから直接技術を学べますし、
3年ぐらいやれば、一通り編集の基本
が身に付きます。もちろん、現役の学
生さんも大歓迎です。興味のある方は、
同窓会事務局へメールでご連絡くださ
い。

■同窓会・大学に関する情報が満載です。

ぜひ一度ご覧ください。

同窓会Webサイト

<https://www.icualumni.com/>

同窓会 Facebook

<https://www.facebook.com/icualumniassociation>

大学 Web サイト <https://www.icu.ac.jp/>

JICUF Web サイト <https://www.jicuf.org/>

■ICU 同窓会事務局

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2

TEL&FAX : 0422-33-3320

Email : aaoffice@icualumni.com

